

脚裾の広がり大きい。短い脚柱部に、器壁の薄い「ハ」の字形に開く長い裾部をもつ。円盤充填法を取る。(225)は、杯部が屈曲する形態である。口径19.5cm、高さ16.2cmを測る。口縁部は、体部に較べやや短い、外反の度合はかなり大きい。脚裾部は、屈曲して大きく直線的に開き、そこに、3個が対になる6個の円孔をあける。脚柱部は、下から円筒形の工具を突きあげて成形している。淡黄色の精良な胎土を用いる。

層位不明遺物 (第44・45図)

この他出土層位が不明なものがある。

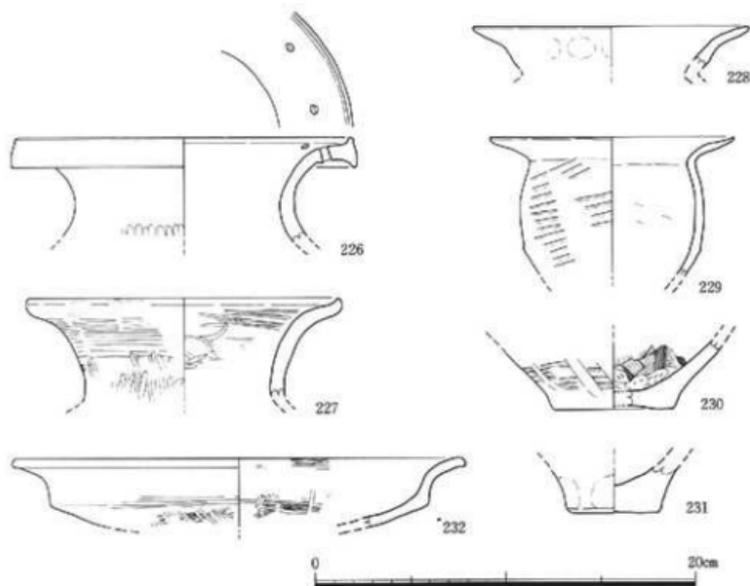
(226)は、口縁部に紐孔をもつ無紋の壺で、中期後半である。

(227)は、無紋の壺で口縁上端が内彎する。

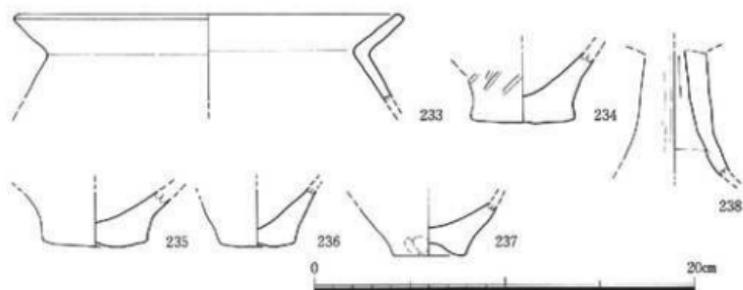
(228～231)は甕である。(229)は、小型品で外面にタタキを施す。

(232)は、高杯で、口縁部は短く強く外反する。

(233～237)は、甕である。(233)の口縁は、「く」の字形に外反する。底部は小さく、摩滅が著しい。(238)は、高杯の脚部である。



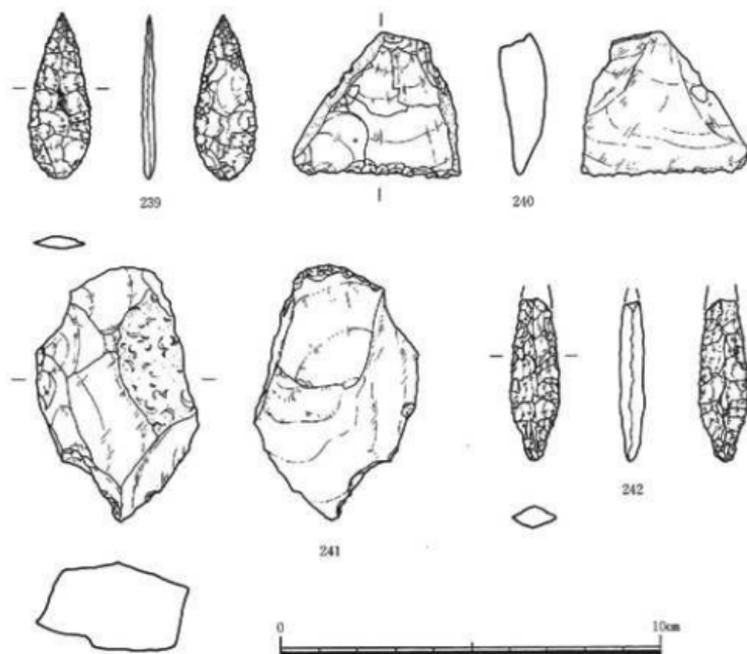
第44図 787-O R出土層位不明土器 (1/3)



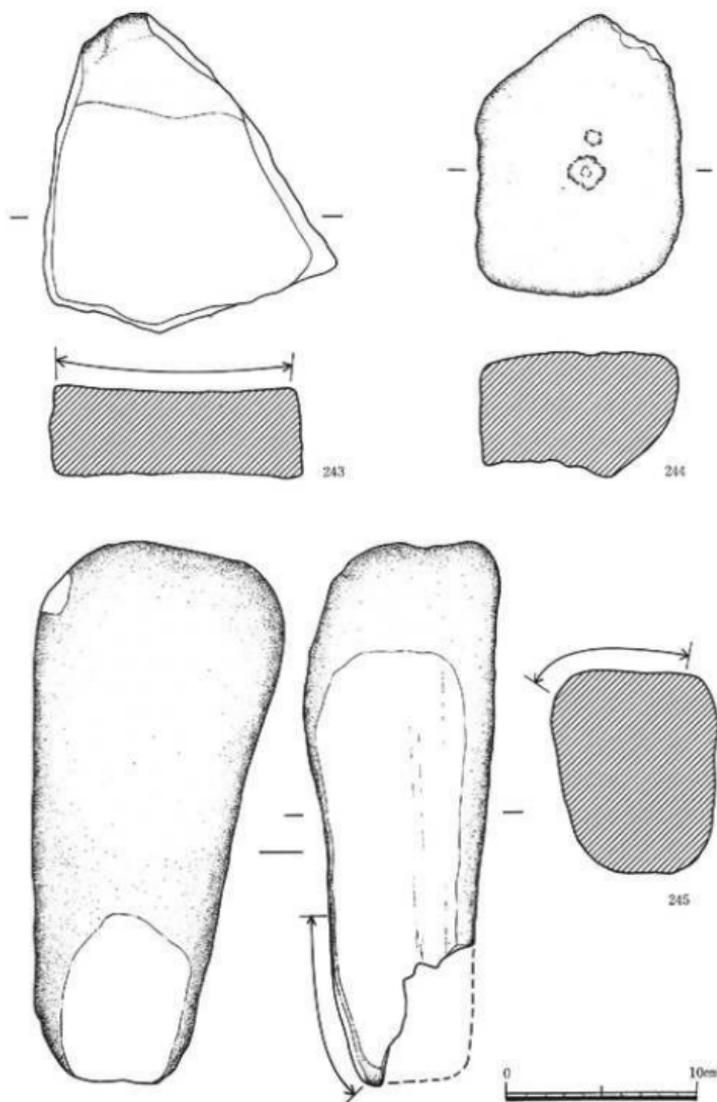
第45図 787-O R東冢出土層位不明土器 (1/3)

787-OR出土石器 (第46・47図、図版42・43)

出土した石器は、石鎌、石錐、不定形の削器、石核、砥石、凹石がある。



第46図 787-O R出土石器 (2/3)



第47图 787-O R出土石器 (1/3)

(239) は、円基式の扁平な石鎌である。周囲には鋸歯状の細かい剝離を加えている。A面の背稜部には、磨痕がある。

(240) は、不定形の削器である。主剝離面の右側に自然面を残す。下部に細かい調整剝離を施す。

(241) は、石核である。1面に自然面を残す。

(242) は、身の断面菱形の厚みのある凸基式の石鎌である。先端部を欠損する。

(243) は、扁平な砥石である。粗質の砂岩製で、上面を砥面とする。側面には、荒い打ち欠きが見られる。石質はかなり脆い。

(245) は、大形の砂岩製の砥石である。かなり重量がある。長方形の自然礫の側面に研磨による浅い筋状のへこみがみられ、上面の先端部にも磨痕がある。

787-OR出土土器の時期

土器群6は、弥生時代後期後半、唐古45号土坑上層式の時期である。

3層は、長頸壺も典型的なものではなく、口縁部の垂下する壺も少ない。高杯も碗形杯部で脚台が低いものもあること、加飾壺を含むことから、弥生時代後期でも土器群6に近い年代であろう。

東層3層は、弥生時代中期後半のものをかなり含むが、(131)の高杯が、古墳時代前期初頭、庄内式の傾向を示し、(111・126)も同様である。時期幅があり878-OSとの混在が予想されるが、787-ORでは、最も新しい一群である。

4層は、(183)の製塩土器脚部、(188)の裾開きの高杯を除けば、弥生時代後期前半のものが大半を占める。

6層は、出土数が少ないが、中期後半のものしか出土していない。5層には、後期の遺物を含むが、特に新しい時期のものは見られない。

1300-OR

1300-ORは、中央微高地の南側に存在する弥生時代の自然河川の総称である。幅約37.8m、最深約1mを測る。走路方向は、地形から見て南から北へと考えられる。堆積は、均一ではないが、滞水期を示すと思われる褐色を呈するラミナ（葉層）が2層観察されることから、大きく3層に分けることができる。

また1300-ORは時期により流路幅が増減し、879-OR・877-ORを形成している。これらのことから1300-OR全体を通して5層に分けることができる。

1300-OR 1層 [877-OR] (第49図)

1層は1300-ORがほとんど埋没した後に流れた877-ORである。幅約3.0m、深さ約1.0mを測る。877-ORはさらに大きく上下層に分れる。上層は灰オリーブ系の砂質シルト、下層は砂礫層である。遺物の検出は、上・下層の他に任意に中間層を設けて行った。検出された遺物は畿内第V様式後半の範囲に含まれるものが大多数を占め、数点中期の遺物を含む。

1300-OR 2層

2層は上位のラミナ（黒粘1）までの堆積である。この層からは第V様式後半の弥生土器が出土した。出土遺物の点数はさほど多くない。

1300-OR 3層 [879-OR] (第50図、図版12a・b)

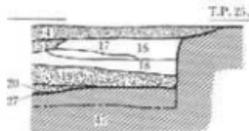
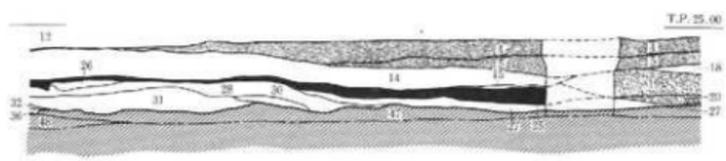
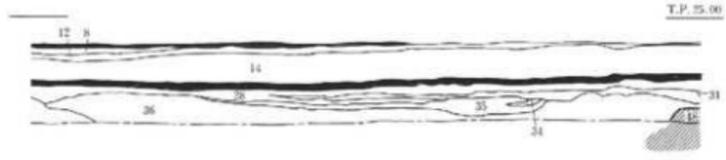
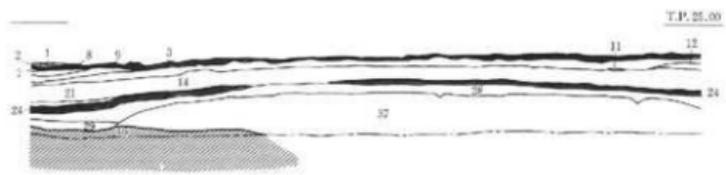
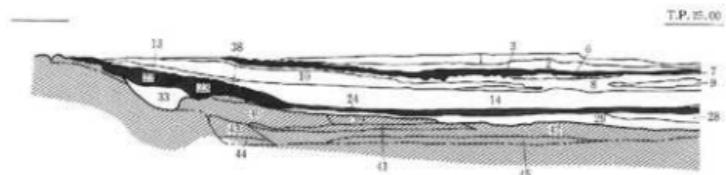
3層は879-ORである。879-ORは、下位のラミナ（黒粘2）を切り込み、877-ORの下部に位置する。幅約2.0～6.0m、深さ約0.5～1.0mを測る。埋土は灰色系の砂礫層である。畿内第V様式後半の遺物を検出した。遺物の出土量は多くない。

1300-OR 4層 (第7図)

4層は下位のラミナ（黒粘2）までの堆積である。この層から多量の遺物を検出した。とくに1300-ORの北肩の斜面上で、多量の土器が固まって出土した（1300-OR北肩土器群）。

1300-OR 5層

5層は地山面までの堆積である。この層はさらに上下に分けられる。上層（5a層）は青灰色系の砂質シルト層上面までである。この層には弥生中期の土器と後期の土器が混在する。下層（5b層）は礫層までである。青灰色系の砂質シルト層の下位は砂層と植物遺体層との互層となっている。この層には弥生土器と縄紋土器が混在している。（395）は、青灰色系砂質シルト層の上面、やや微高地となった箇所固定して出土した。

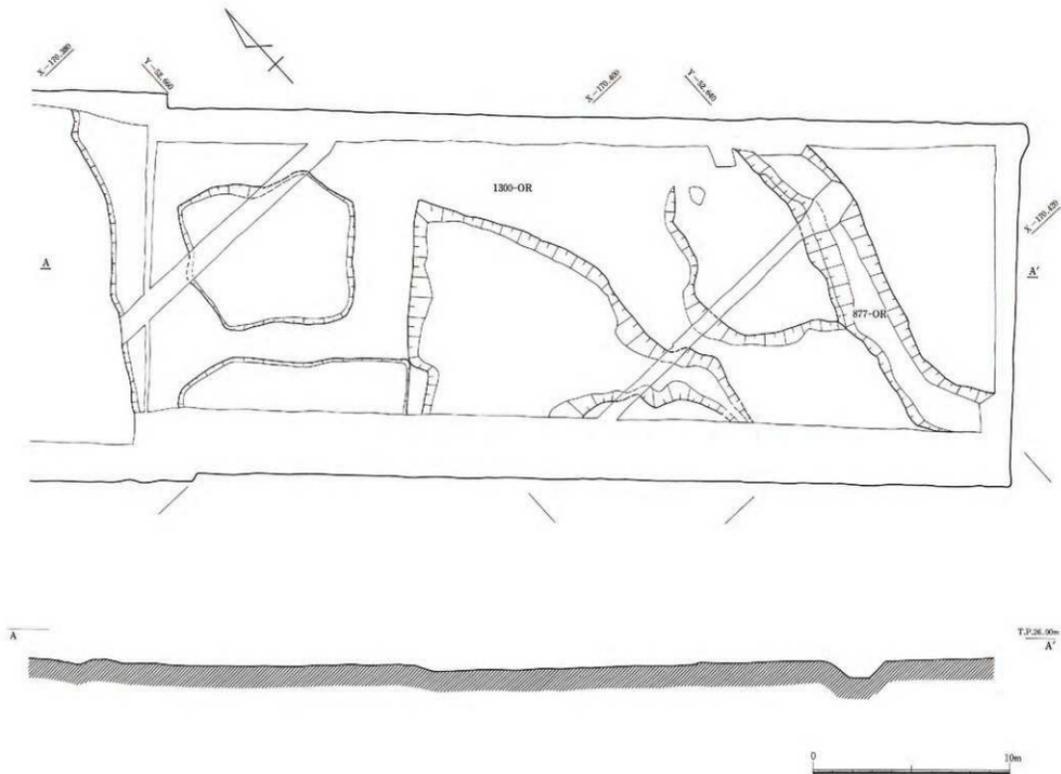


- 黒褐色粘質シルト (クミナ)
- 877-OR
- 879-OR

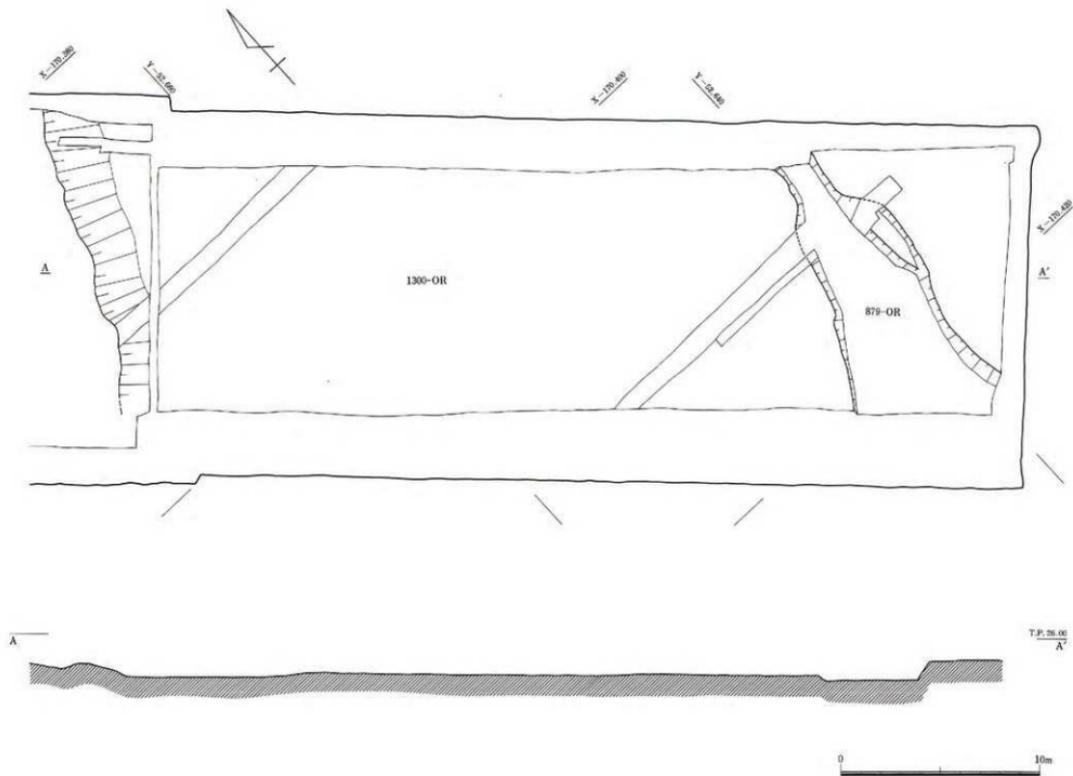
- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 2.5V4/1 黒褐色粘質シルト | 25. 10R7/1 褐色粘質シルト |
| 2. 10V8/1/2 黒褐色粘質シルト | 26. 2.5V5/1 黒褐色粘質シルト |
| 3. 2.5V3/1 黒褐色粘質シルト | 27. 10V8/1/2 黒褐色粘質シルト、遺物層存在 |
| 4. 1.5V6/2 粘りやすいシルト | 28. 2.5V4/1 黒褐色粘質シルト、遺物層存在 |
| 5. 2.5V7/1 浅黄色粘質層 | 29. 2.5V3/1 黒褐色粘質シルト |
| 6. 2.5V5/1 黒褐色粘質層 | 30. 10V7/1 褐色粘質シルト |
| 7. 8.5V3/4 黒褐色粘質層 | 31. 10V7/1 褐色粘質シルト |
| 8. 5V4/1 灰色シルト、褐色炭化物付着 | 32. 2.5V3/1 褐色粘質シルト |
| 9. 5V4/3 粘りやすいシルト、粒径付 径1~2mm | 33. 2.5V4/2 粘りやすい粘質シルト |
| 10. 5V4/2 粘りやすいシルト、粒径付 径1~2mm | 34. 89 |
| 11. 5V4/1 灰色シルト | 35. 2.5V5/2 黒褐色粘質層 |
| 12. 5V4/1 灰色シルト | 36. 2.5GV6/1 粘りやすい粘質層 |
| 13. 2.6V8/1/6 明褐色・5V3/2 粘りやすい粘質土 | 37. 2.5GV2/1 粘りやすい粘質層付着 |
| 14. 5V4/1 灰色粘土、当地ポイント層付 | 38. 2.5V4/1 灰色粘質シルト |
| 15. 10R7/1 褐色粘質層 | 39. 2.5V4/1 黒褐色粘質シルト |
| 16. 2.5V7/4 粘質粘質層 | 40. 2.5GV5/1 粘りやすい粘質土 |
| 17. 2.5GV6/1 灰色粘質シルト | 41. 10V8/1/2 粘質粘質シルト、粒径付 |
| 18. 10V8/1 粘り粘質層 | 42. 2.5GV4/1 粘りやすい粘質シルト、粒径付 径1~2mm |
| 19. 2.5V5/1 粘り粘質層 | 43. 2.5GV5/1 粘りやすい粘質シルト、粒径付 径2~10mm |
| 20. 2.5GV5/1 粘り粘質層 | 44. 2.5V5/1 黒褐色粘質シルト |
| 21. 2.5V5/2 粘り粘質粘質シルト | 45. 2.5V8/2 灰色粘質シルト |
| 22. 2.5V3/1 黒褐色粘質シルト・2.5V8/5/6 明褐色層 | 46. 2.5GV5/1 粘り粘質層付着 |
| 23. 2.5V3/1 黒褐色粘質シルト | 47. 2.5GV6/1 粘り粘質層 |
| 24. 1.5V2/1 粘り粘質粘質土 | 48. 2.5V5/1 黒褐色粘質シルト |



第48図 1300-O-R断面土層図 (1/80)



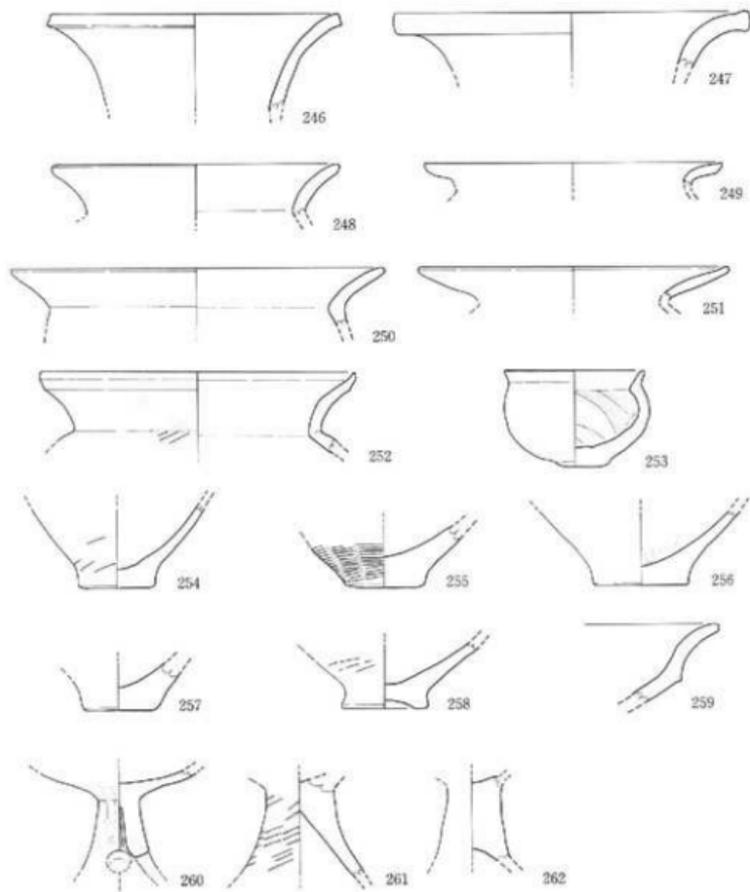
第49図 1300-O R第1期平面・断面図 (1/200)



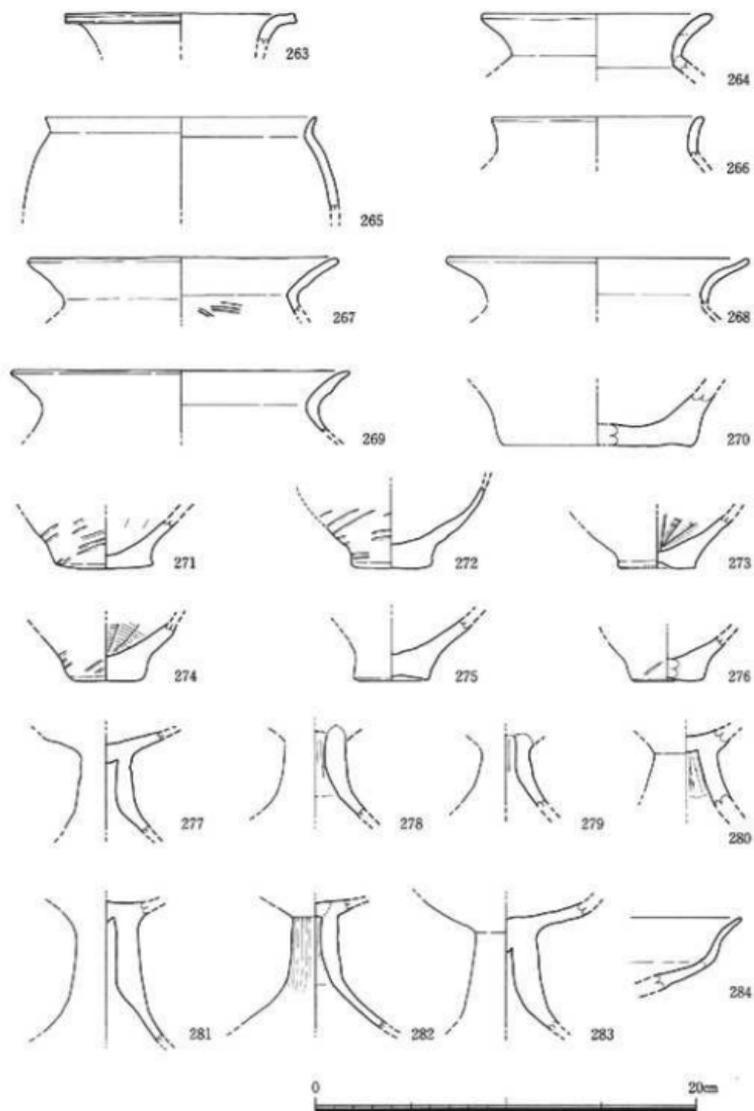
第50圖 1300-O R第2期平面・断面図 (1/200)

1300-OR1層 [877-OR1層] 出土遺物 (第51図、図版29a・30b)

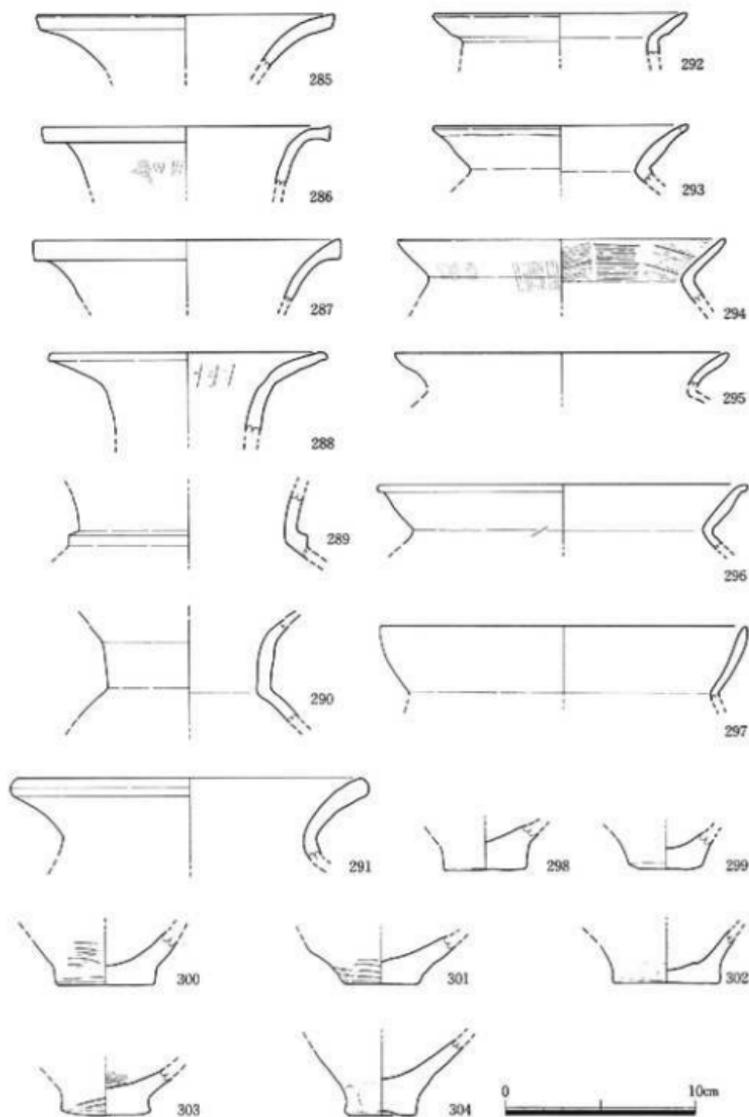
(246・247) は広口壺である。(248~252) は壺である。(252) は口径16.4cm。口縁端部をやや「く」の字状に屈曲させる。口縁部外面にハケ調整が認められる。(253) は



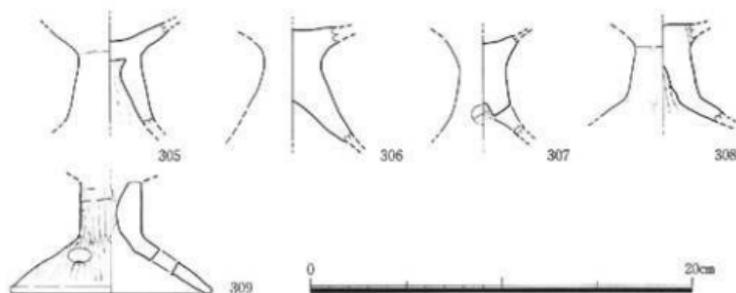
第51図 877-OR1層出土土器 (1/3)



第52图 877-OR 1、2层出土土器 (1/3)



第53圖 877-O R 2層出土土器 (1/3)



第54図 877-OR 2層出土土器 (1/3)

ミニチュアの壺である。無頸壺を原形としたものと思われる。口径7.2cm、器高5.1cm、底径2.4cm。口縁部は短く外反する。内面にハケ調整を施している。(254~258)は底部である。(255)は現存器高4.1cm、底径2.8cm。面取り風のタキを施す。(259~262)は高杯である。(261)は、現存器高5.0cm。外面にタキを施す。

1300-OR 1層〔877-OR 1・2層〕出土遺物 (52図、図版29b)

(263)は広口壺である。(265)は無頸壺である。口径14.2cm、現存器高5.0cm。口縁部は短く外反する。(266)は短頸直口壺である。口径11.0cm。(264・267~269)は甕である。(270~276)は底部である。(270)は底径10.0cm。弥生時代中期のものと思われる。(277~284)は高杯である。

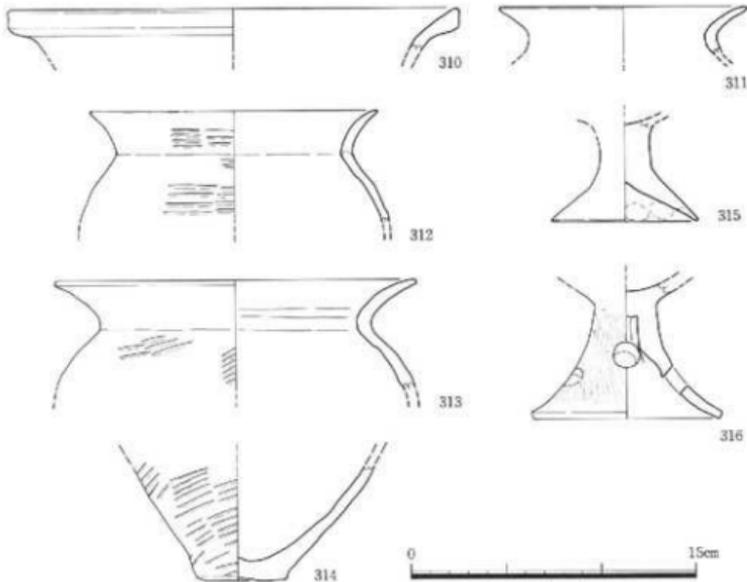
1300-OR 1層〔877-OR 2層〕出土遺物 (第53・54図、図版30a・30b)

(285~291)は広口壺である。(286)は口径15.2cm。頸部は大きく外反し、口縁部は水平方向に開く。端部に面を持つ。頸部外面にハケ調整が認められる。(289)は頸部基底部に凸帯を有する。(292~296)は甕である。(297)は鉢である。口径13.4cm。口縁部は内彎ぎみに開く。(298~304)は底部である。(305~309)は高杯である。(309)は脚部底径10.3cm、現存器高6.0cm。外面にヘラミガキを施す。内面に絞り痕が認められる。3方向にスカシ窓を穿つ。

1300-OR 2層出土遺物 (第55図)

(310)は広口壺である。(311~314)は甕である。(312)は口径15.0cm、現存器高6.0cm。口縁部はやや外反し、外面にタキを施す。(313)は口径18.8cm、口縁部は大きく外反する。(314)は甕の底部とみられる。底面はドーナツ状を呈する。(315・316)は高杯である。(315)は脚部底径7.6cm、現存器高5.1cm、小型の碗状の杯部を有するタイ

ブと考えられる。スカシ窓をもたない。胎土はやや粗く、焼成はやや不良である。(316)は脚部底径9.8cm、現存器高7.2cm。外面にヘラミガキを施し、内面に絞り痕が認められる。4方にスカシ窓を互い違いに穿つ。



第55図 1300-OR2層出土土器 (1/3)

1300-OR3層〔879-OR〕出土遺物 (第56図、図版30c)

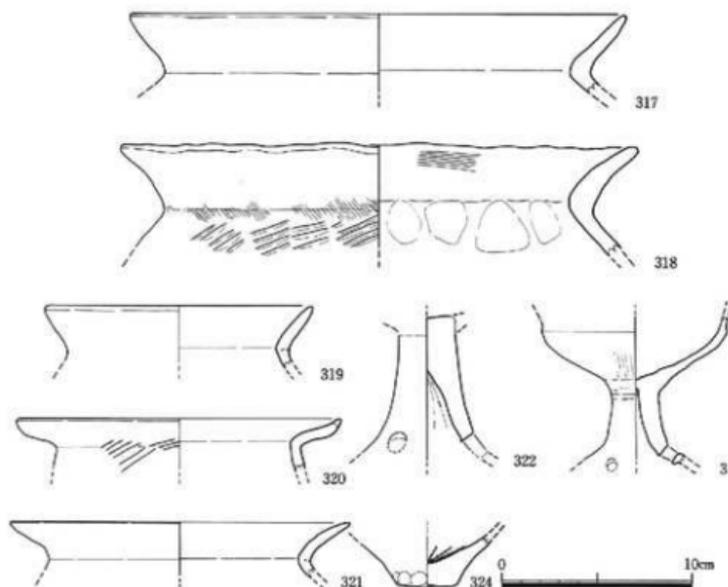
(317~321)は甕である。(317)は口径25.9cm。(318)は口径27.0cm。口縁部は大きく外反し、端部は波うった状態である。頸部の内外面にハケ調整が認められる。器壁は厚手である。

(322・323)は高杯である。(323)は現存器高7.4cm。口縁部は遺存していないが、杯部に稜線を有し口縁部は外反するようである。脚部外面にヘラミガキを施し、内面に絞り痕が認められる。3方に小さなスカシ窓を穿つ。

(324)は底部である。上げ底状を呈する。

1300-OR4層〔1300-OR北屑土器群〕出土遺物 (第57~60図、図版31~32b)

(325~328)は甕である。(325)は広口壺である。現存器高29.4cm、底径5.0cmを測る。



第56図 879-OR出土土器 (1/3)

頸部は短く直立し、口縁部が外反するタイプと思われる。体部は大きく膨らみ球形に近い。分割成形が認められる。体部下半にタタキを施した後、ナデを施す。体部上半に横方向のヘラミガキを施す。口縁部接合後、口縁部から肩部にかけて粘土を補填している。(328)は広口壺である。口径20.6cm、現存器高10.9cm。頸部は直立し、口縁部は肥厚させ外反する。頸部外面にハゲ調整が認められる。器壁は厚手で、胎土に5mm大の小石を含む。

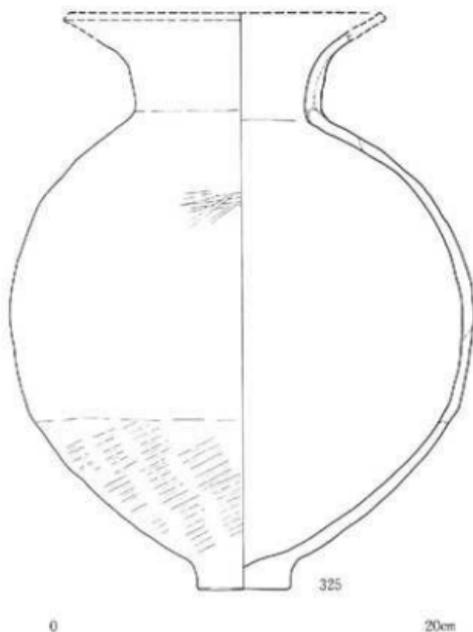
(329~337)は壺である。(329~335)は口縁部が直線的に外反する特徴を備えている。(329)は口径15.0cm、体部外面に粗いタタキを施す。(331)は口径13.0cm、外面のタタキは口縁部にも及ぶ。

(338)は鉢である。口径13.6cm、器高12.9cm、底径3.8cm。外面は口縁部付近から底部にかけてタタキを施し、内面に板ナデを施す。(339~354)は底部である。(355~369)は高杯である。(355)は碗状の杯部を持つタイプである。口径14.8cmを測る。内面に丁寧なヘラミガキを施す。

(356~361)は口縁部が外反し体部との間に明瞭な稜線を有するタイプである。口径は

およそ18.5～24.2cmまでの
範疇に含まれる。調整はい
ずれも摩耗のため詳細は不
明であるが、ヘラミガキを
施したものと思われる。

(362)は脚部底径12.4cm、
現存器高8.1cm。内面に絞
り痕が認められる。3方に
スカシ窓を穿つ。(363)
は脚部底径13.8cm、現存器
高8.3cm。外面に縦方向の
ヘラミガキを施した後、端
部付近に横方向のヘラミガ
キを施す。内面に絞り痕が
認められる。3方向にスカ
シ窓を穿つ。

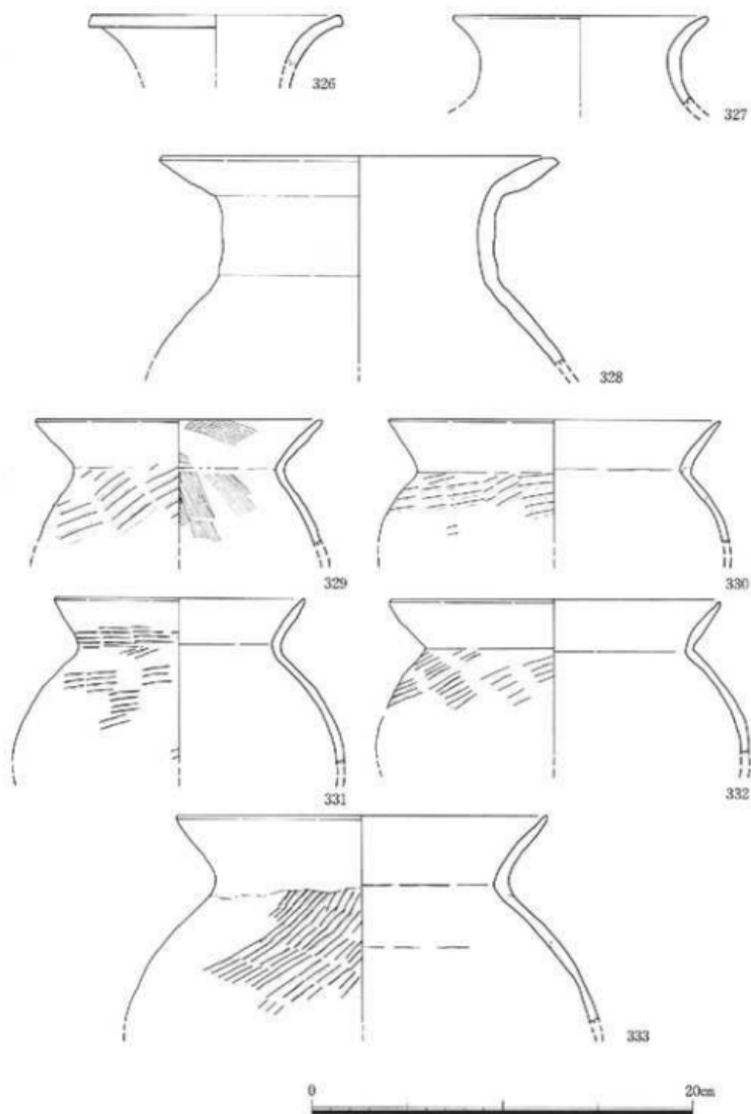


第57図 1300-OR北冨土器群出土土器

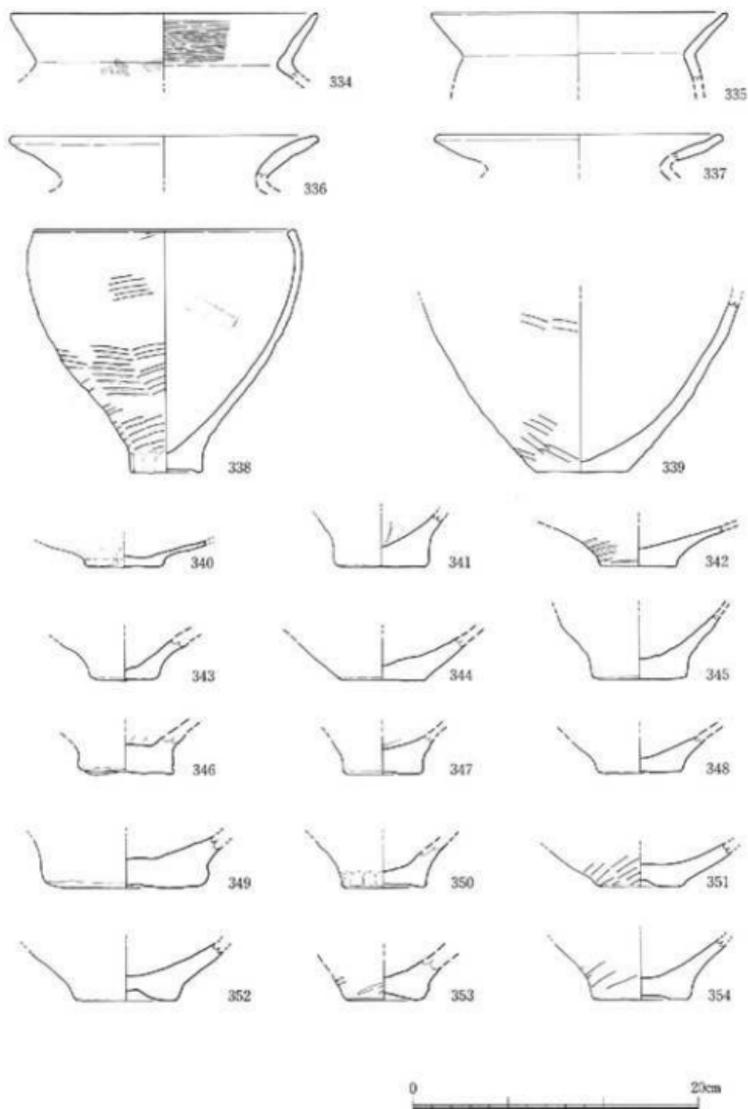
1300-OR 4層出土遺物 (第61・62図、図版32a・33a)

(370～373)は第Ⅳ様式の広口壺である。(370)は口径17.0cm。口縁端部を上下に拡張し、頸部に二孔一対の紐孔を穿つ。外面に煤の付着が認められる。(372)は口径19.9cm、現存器高7.9cm。口縁端部を上下に拡張し、端面は直立する。頸部外面にヘラミガキを施す。(373)は口径20.6cm。口縁端部を上下に拡張し、端面は内傾する。外面に煤の付着が認められる。

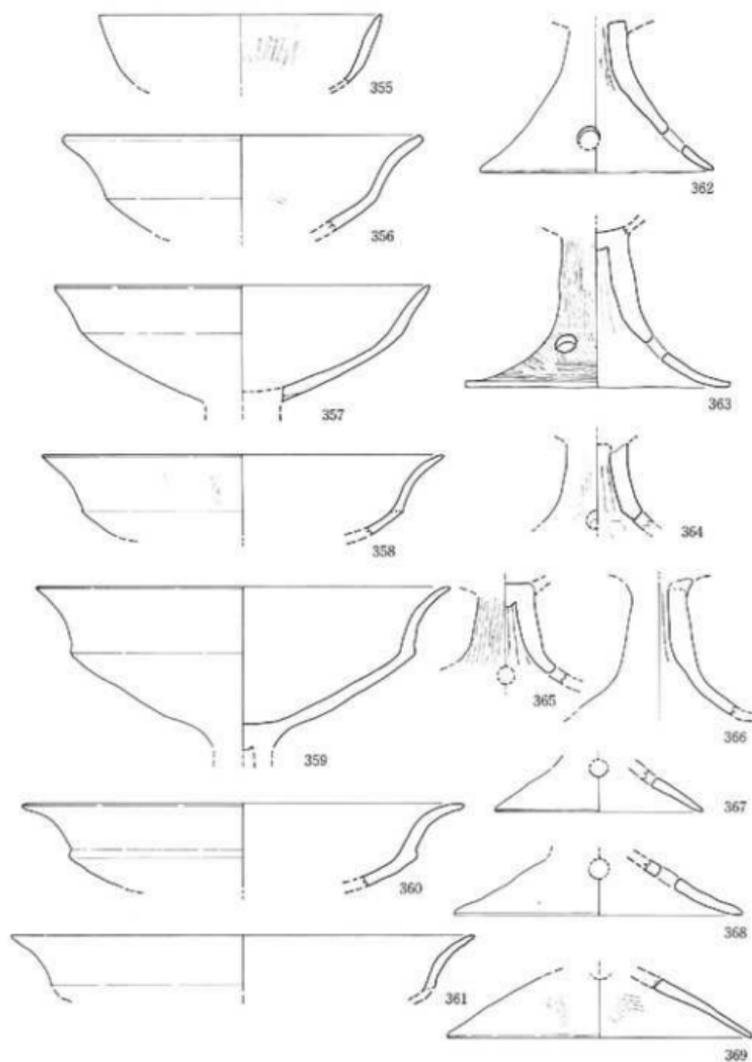
(374・375)は第Ⅴ様式の広口壺である。(376・383・384)は第Ⅴ様式の甕である。(376)は口径20.2cm、器高24.5cm、底径4.8cmを測る。分割成形が認められる。口縁部は体部成形後、外面にタタキを施した後には接合する。内面は接合後にハケ調整を行う。(377～382・385・386)は底部である。(378・379・381)は中期のものと思われる。(379)は外面にヘラミガキを施す。



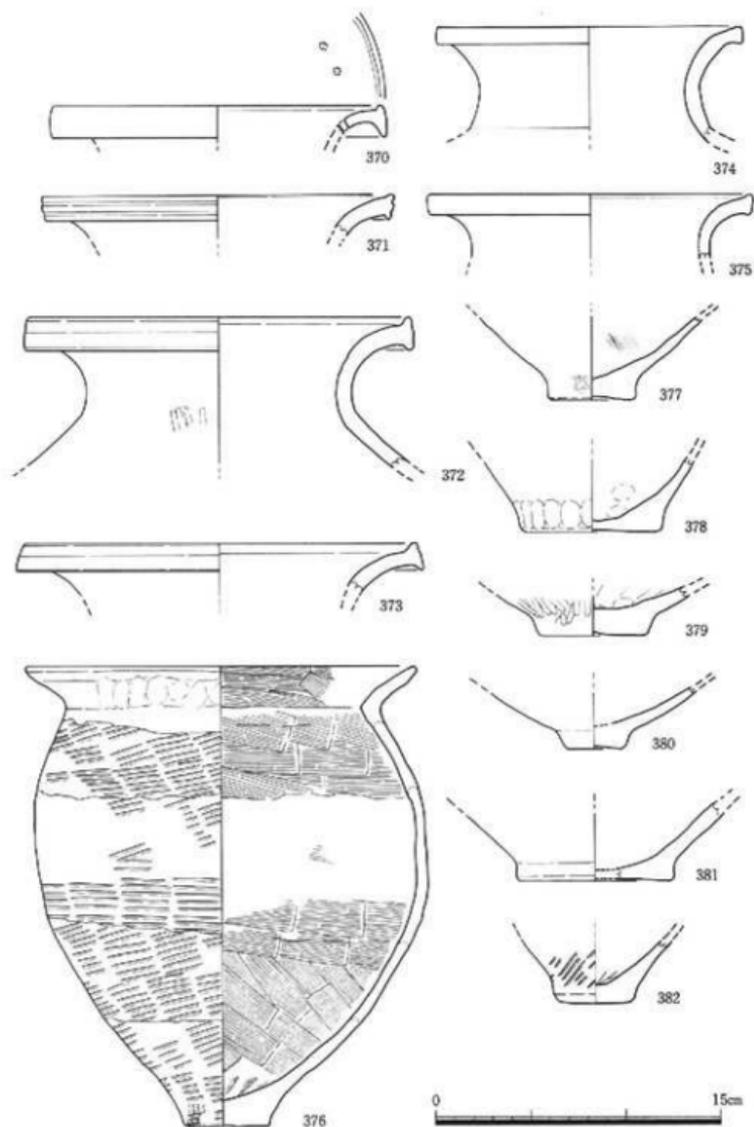
第58圖 1300-O R北周土器群出土土器 (1/3)



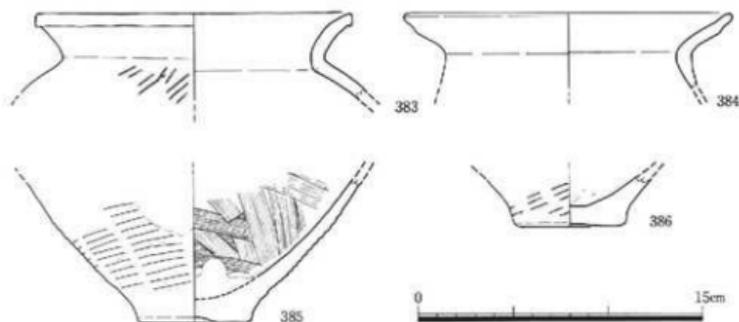
第59圖 1300-O R北冨土器群出土土器 (1/3)



第60圖 1300-O R北兩土器群出土土器 (1/3)



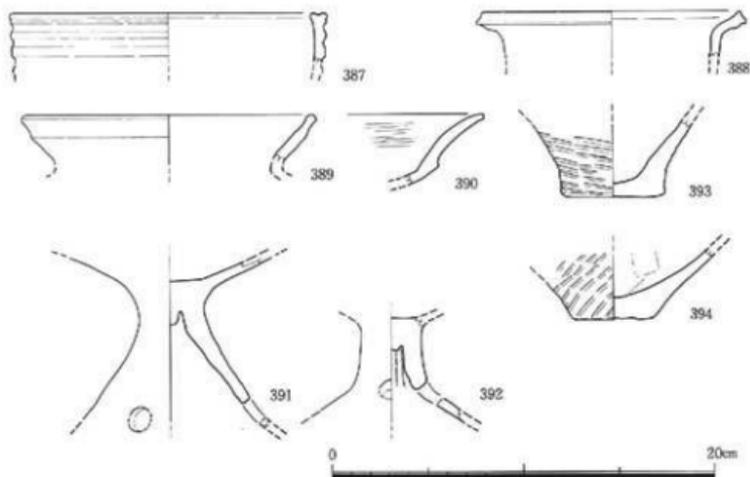
第61図 1300-OR 4層出土土器 (1/3)



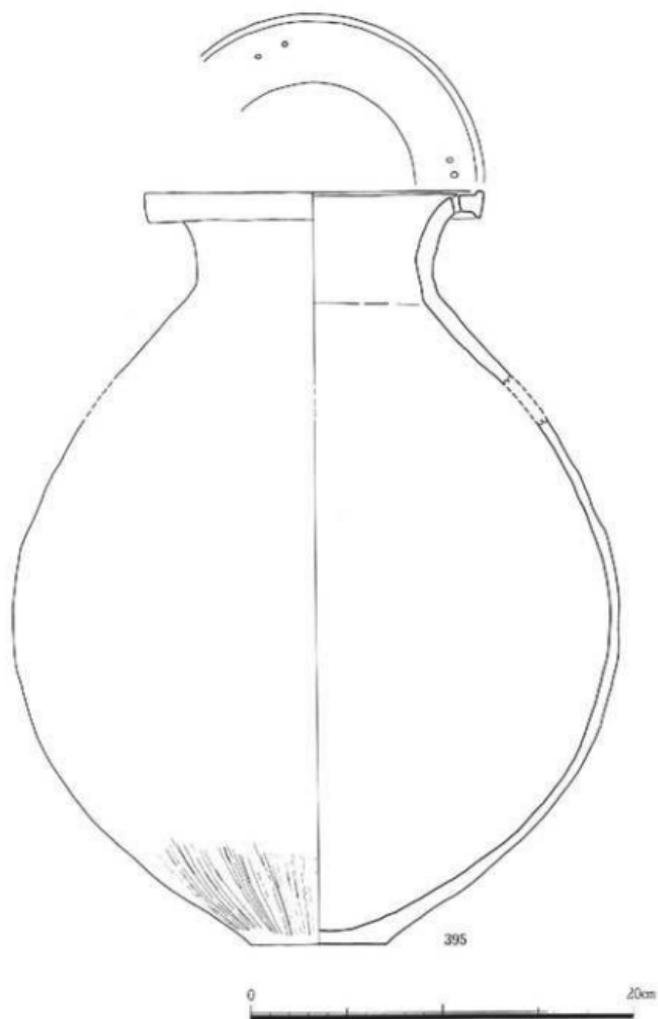
第62図 1300-OR 4層出土土器 (1/3)

1300-OR 5層出土遺物 (第63・64図、図版33b)

(387) は中期後葉の鉢である。口径16.4cm。口縁端部は凹面を呈し、口縁部外面に3条の凹線が巡る。胎土は緻密で、焼成は良好である。(388) は中期後葉の壺である。口径13.4cm。口縁部はやや肥厚し、端部は凹面を呈する。胎土は緻密で、焼成は良好。外面に煤の付着が認められる。(389) は第V様式の甕である。口径15.0cm。口縁部は「く」の字状に外反する。胎土は緻密で、焼成は良好である。

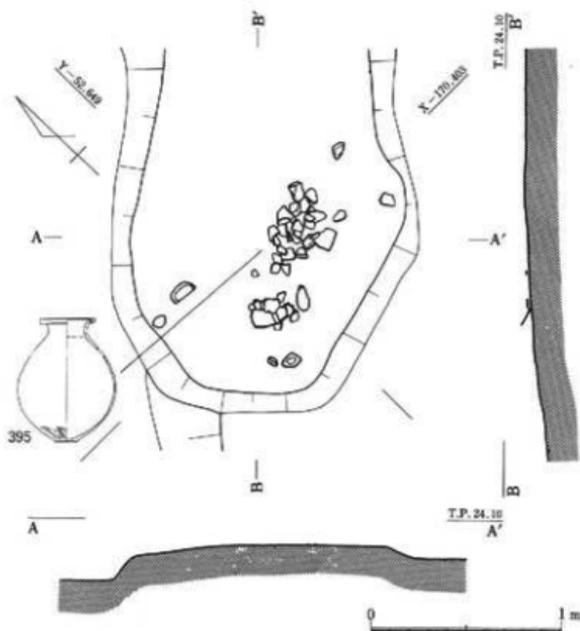


第63図 1300-OR 5層出土土器 (1/3)



第64圖 1300-OR 5層出土土器 (1/3)

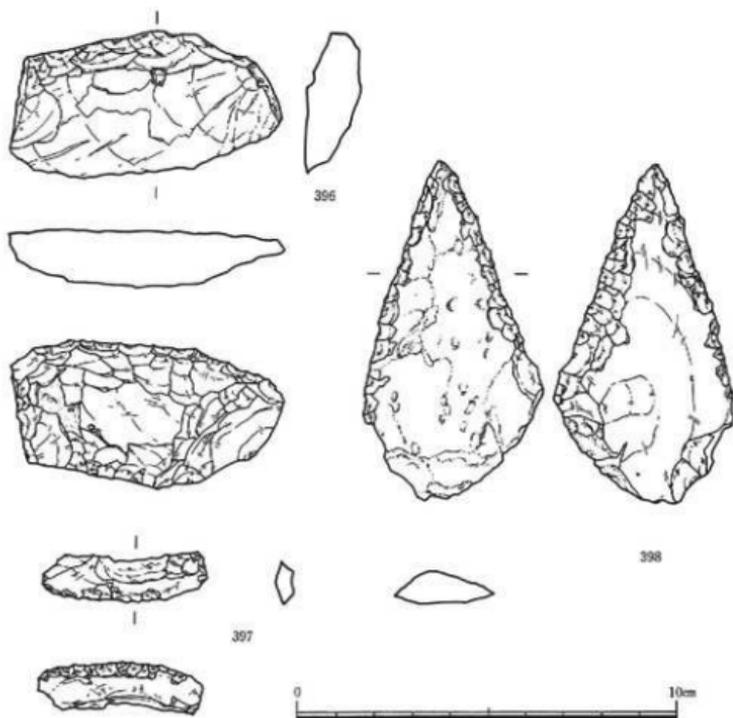
(390~392) は第V様式の高杯である。(391) は現存器高8.8cm。脚部に4方向のスカシ窓を穿つ。(393・394) は底部である。いずれにも外面にタタキを施す。(395) は第IV様式の広口壺である。口径17.7cm、復元器高40.0cm、底径7.0cmを測る。口縁端部に上下に拡張し、端面はやや外傾する。頸部に二孔一対の細孔を穿つ。頸部は短くやや外反し、体部は下膨れとなり底部は平底となる。体部外面下半に、縦方向のヘラミガキが認められる。外面に煤の付着が見られる。



第65図 1300-OR 5層遺物出土状況図 (1/30)

1300-OR出土石器 (第66図、図版44)

いずれも4層からの出土である。(396・397) はスクレーパーである。前者は器長72.2mm、器幅36.2mmを測る。後者は器長43.7mm、器幅12.6mmを測る。(398) は石槍の未成品とみられる。器長89.8mm、器幅47.9mm、53.1gを測る。



第66図 1300-OR出土石器 (2/3)

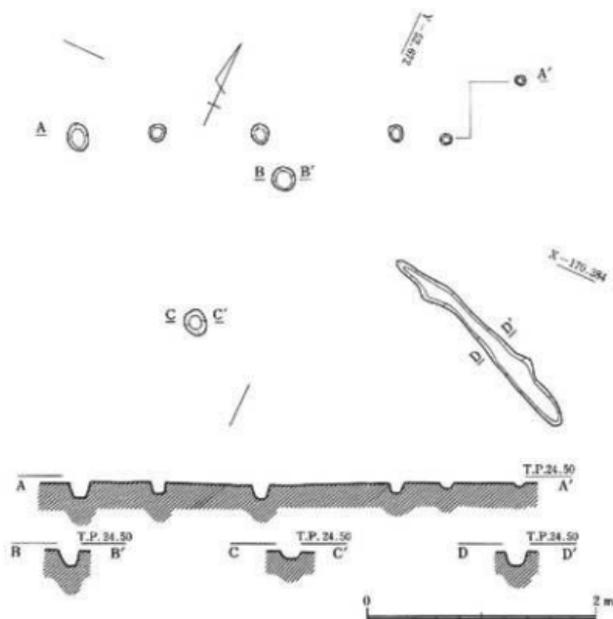
1300-ORの時期

1300-OR 5層には縄紋土器と弥生時代中期後半の土器が多く見られる。また弥生時代後期の土器も若干混在しているが、自然河川の堆積が一律でないことも考慮し、今回の調査地点における1300-ORの堆積は弥生時代中期後半に遡るものと推測される。しかしその後検出された遺物の上からは空白の期間がみられ、堆積の大部分は弥生時代後期後半のものである。北肩土器群出土の土器にはほとんど時期差が見られず一括性が強く、またその出土状態から中央畿高地に集落が営まれた際に放棄されたものと推測される。これにより出土遺物に乏しい竪穴住居跡の時期決定の目安となる。北肩土器群出土の土器は弥生時代後期後葉に比定され、4層出土の遺物の中でも若干新しい様相を示している。その後、3層(879-OR)、2層、1層(877-OR)の堆積が見られるがその間の出土土器にみら

れる時期差は微弱であり、急速な堆積があったことがうかがわれる。その中でも (253) 等に新しい様相が看取られるが、いわゆる庄内式・布留式傾向の土器は認められない。

797-804-OP (第67図)

中央微高地上で、866-ODの南西側に約5m離れたところに位置する。8個の小ピットと1条の溝からなる一連の遺構群である。長さ4.2m幅3mの範囲にまとまる。ピットは、その内の5個が、長さ3.3mに渡り0.4mから1mの間隔で直線的に並ぶ。ピットの大きさは、直径10-20cm、深さ6-12cmを測る。平面形は、円ないし楕円形である。埋土は、褐色ないし暗褐色のシルトである。溝は、ピット群の東南部で台地の傾斜に直交して伸びる。長さ2m、幅0.25m、深さ0.16mを測る。暗灰色シルトを埋土とする。これらの遺構からは、遺物を見ないが、埋土が住居跡と共通するため弥生時代の所産と考えられる。性格については、住居跡の残骸よりも柵状の施設の可能性がある。



第67図 798-804-OP、794-OS平面・断面図 (1/50)

第4節 中近世

第1項 概要

弥生時代後期の集落が営まれた中央微高地上で、後世の土坑等の遺構も検出された。

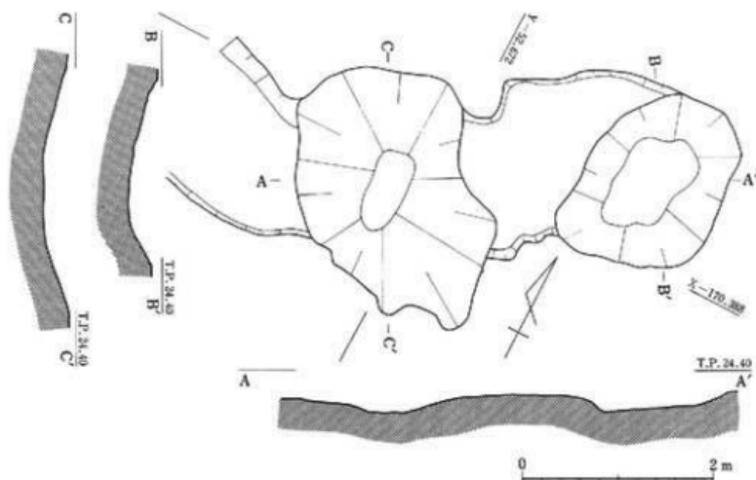
そして今回の調査では、弥生時代後期の遺構面上に数回にわたり耕作地が築かれ、その間に1度の整地が行われたことが判明した。

前節でも記したように、弥生時代後期の遺構面は後世の削平をうけている。そして当時存在した自然河川は、その上層に後世の遺物を包含することから、流水が途絶えてより長らく湿地や窪地の状況を呈していたと推測される。また弥生時代後期の遺構面上において、中世の遺物を含む層を数箇所確認した。この層の上面において畦畔が検出された。以降数回に及ぶ耕作地の変遷が確認された。

第2項 各層・各遺構説明

789-00 (第68図)

島状の台地の肩近くに位置する。溝状の落込みと2つの土坑からなる遺構である。溝状の部分は、長さ7.5m、幅1.7mで、東西方向に台地を取り巻くように曲がり、西端は、開いて終わる。深さ0.3mを測り、埋土は、黄灰色砂質シルトである。土坑状の部分は、不

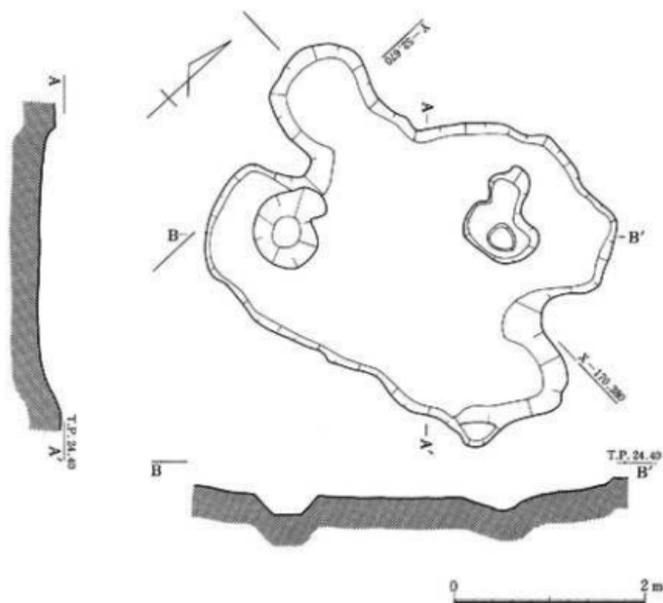


第68図 789-00平面・断面図 (1/60)

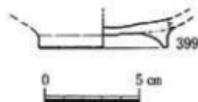
整楕円形を呈す。西側の土坑は、長さ3.0m、幅1.8m、深さ0.2mを測る。底面に拳大の礫がある。東側の土坑は、長さ2.1m、幅1.1m、深さ0.2mである。遺物は全く出土していないが、埋土から中世と考えられる。

810-00 (第69図)

789-00の北側、島状の台地のやや南寄りに位置する。平面形は、不整長方形で長軸が、4.3m、短軸が3.1mで、深さ0.2mを測る。断面は皿状を呈するが、底面の2ヶ所に丸い落込みがある。埋土は、単一層で褐灰色砂質シルトからなる。瓦器碗の口縁部、黒色土器の底部、須恵器の体部など若干の土器片を出土した。量が少ないが、瓦器をもって時期の下限に置くと、13~14世紀初頭の所産となろう。性格は不明である。



第69図 810-00平面・断面図 (1/60)



出土遺物 (第70図)

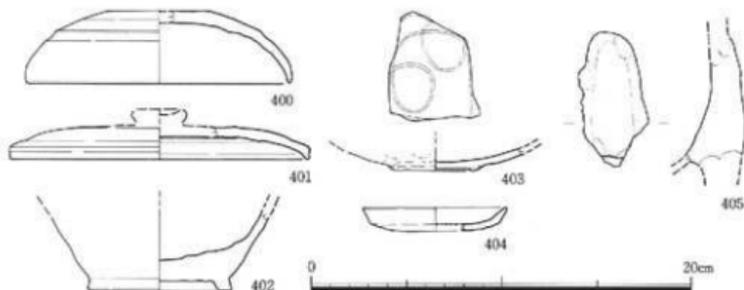
(399) は黒色土器碗である。底径6.8cm。内面は黒色を呈し、ヘラミガキが認められる。A類とB類の判別は不明である。

第70図 810-00出土土器 (1/3)

中近世耕作関連の遺構・層位

第5層

III c 層は、中央微高地や1300-OR上面の窪んだ箇所部分的に堆積した灰黄褐色系の砂質シルト層である。上質は整穴住居跡等の埋上や自然河川の堆積土上層のそれとは異なり、むしろこの層の上層にあたる中世耕作土の土質に近い。奈良・平安時代の遺物を比較的多く含み、瓦器等の中世の遺物も含む。



第71図 第5層出土土器 (1/3)

第5層出土遺物 (第71図)

(400) は須恵器杯蓋である。口径13.8cm。器高のおよそ2/5にヘラケズリを施す。天井部と口縁部を隔する稜が明瞭でなく、口縁端部を丸く仕上げる。(401) は須恵器杯蓋である。口径15.6cm。8世紀中頃に比定される。(402) は須恵器壺である。底径7.4cm、「ハ」の字状に開く高台が底部に取り付く。底面に回転糸切り痕が認められる。平安時代のもと考えられる。(403) 瓦器碗である。底径4.2cm、内面に螺旋状の暗紋が認められる。扁平化した低い高台をもつ。(404) は土師器皿である。口径7.6cm、器高1.2cmを測る。(405) は瓦器三足の脚部付け根である。この他にも奈良・平安時代の須恵器杯や土師器碗の破片等が出土した。

第1耕作面 (第90図)

第1耕作面は調査区の全面で検出した。耕作地基底面は北端でT.P.23.90m、南端でT.P.24.88m、比高およそ1.0mを測り、南から順次標高を減じている。調査区の北半分では断面観察により3条の畦畔を確認し、南半分では4条の畦畔を検出した。耕作地は都合7枚検出した。

耕作土は暗灰黄色系砂質シルトである。

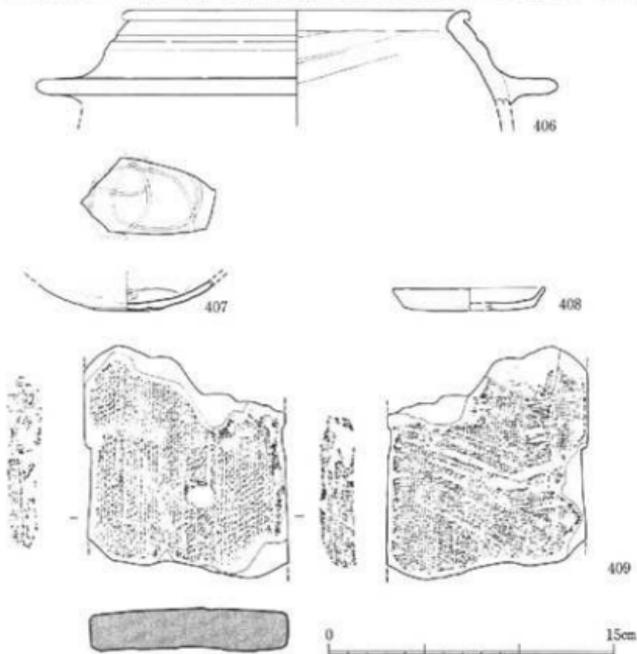
畦畔は弥生時代後期遺構検出面やⅢc層上面に築かれている。畦畔は明灰黄色系シルトの盛土である。検出された畦畔は全て調査区に直交する。走行方向はおよそN-45°-Eである。畦畔の断面形は蒲鉾形を呈し、上部に平端面をもつ。いずれも基底幅およそ1.0m、比高0.2mを測る。南端の876-OAは、南側微高地上では検出できず、地山の削りだしによる畦畔の存在も確認されなかったため、本来低地部のみには畦畔を築き耕作地としていたと思われる。

なお、これより後、現実方向と異なるが、便宜上調査区に直交する方向を東西方向、平行する方向を南北方向と表記することにする。

第1耕作面畦畔出土遺物 (第72図 図版34a)

(406~408)は873-OA、(409)は874-OA出土である。

(406)は土師器羽釜である。口径17.4cm。口縁端部を欠損しているが端部は丸く、外反すると見られる。口縁部に浅い凹線と凸線が巡る。内面に板ナデを施す。(407)は瓦



第72図 第1耕作面畦畔出土土器・瓦 (1/3)

器碗である。底径3.4cm。高台は扁平化しており非常に低い。内面に螺旋状の暗紋が認められる。(408)は土師器皿である。口径7.9cm、器高1.2cmを測る。(409)は鬘斗瓦である。短辺10.2cm、長辺の現存長11.1cm、厚さ2.1cmを測る。桶巻作りである。模倣痕が認められる。凸面に縄タキ痕が、凹面に布目疔痕が見られる。側面は切り離しのままである。

第1耕作面耕土出土遺物 (第73~76図 図版34b~36a・45)

(410)は須恵器甕である。(411)は土師器製塩土器である。口径9.0cm。

(412)は土師器碗である。口径17.8cm、現存器高5.1cmを測る。(413)は緑釉陶器である。底径6.8cm。(414)は瓦器碗である。

(415)は黒色土器である。底径7.3cm。内面に僅かながら炭素の吸着が認められる。外面の摩耗がはげしく、A類とB類の判別は不明である。内面にヘラミガキが認められる。

(416)は土師器甕である。口径26.4cm。

(417~423)は瓦器碗である。(417)は口径11.8cm、内面にヘラミガキが認められる。

(418・419)はいずれも口径10.8cmを測る。(417~419)はいずれも高台が付くタイプと思われる。(420~423)は瓦器碗の底部である。内面に斜格子状(420)と螺旋状(421~423)の暗紋が認められる。

(424~427)は瓦器皿である。(424)は口径9.0cm、器高1.5cmを測る。内面に平行線状の暗紋が認められる。(428~431)は土師器皿である。

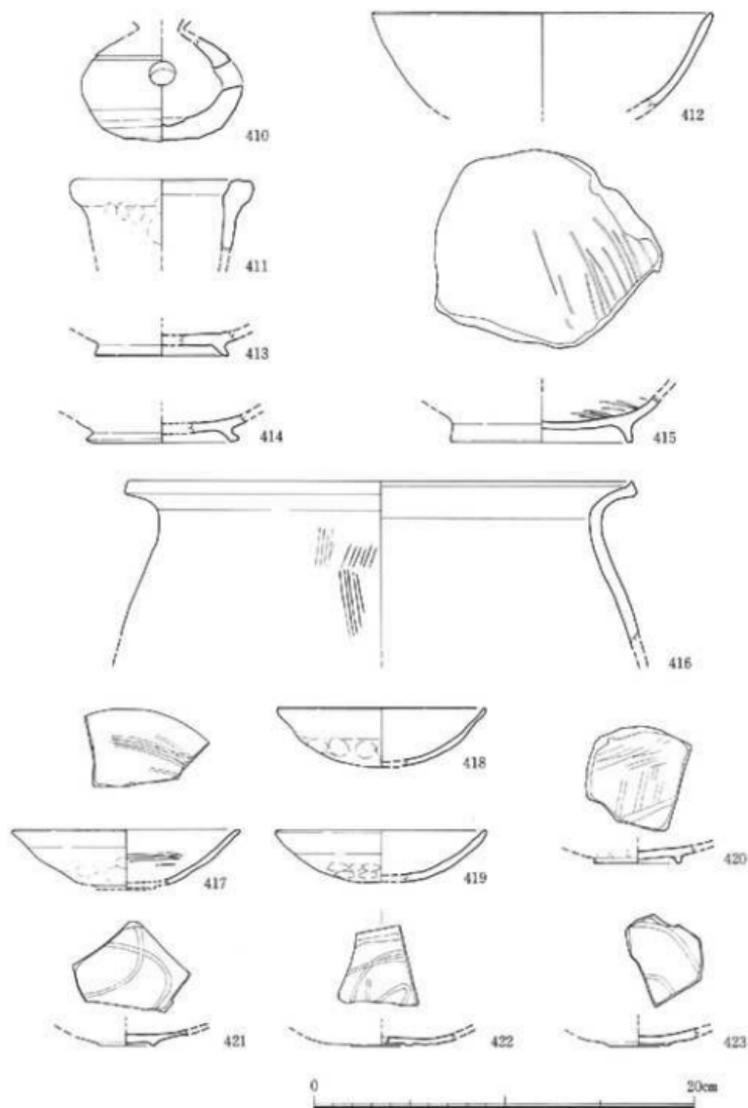
(432)は瓦器羽釜である。口径16.9cm。口縁端部は水平方向に面をもち、口縁部は浅い段状を呈する。(433~435)は土師器羽釜である。(433)は口径24.0cm。口縁端部はやや丸く、外反する。(434)は口縁端部はやや角張った形を呈する。

(436~438)は須恵器鉢、(439・440)は瓦器鉢である。口縁端部の形態には、端部が丸いものと鋭角的なものがある。また上方にやや拡張するタイプと、下方に拡張するタイプとがある。(436)は口径20.5cm。口縁端部は丸く、やや内彎気味である。(440)は口径21.2cm。口縁端部は鋭角的である。内面に煤の付着が認められる。

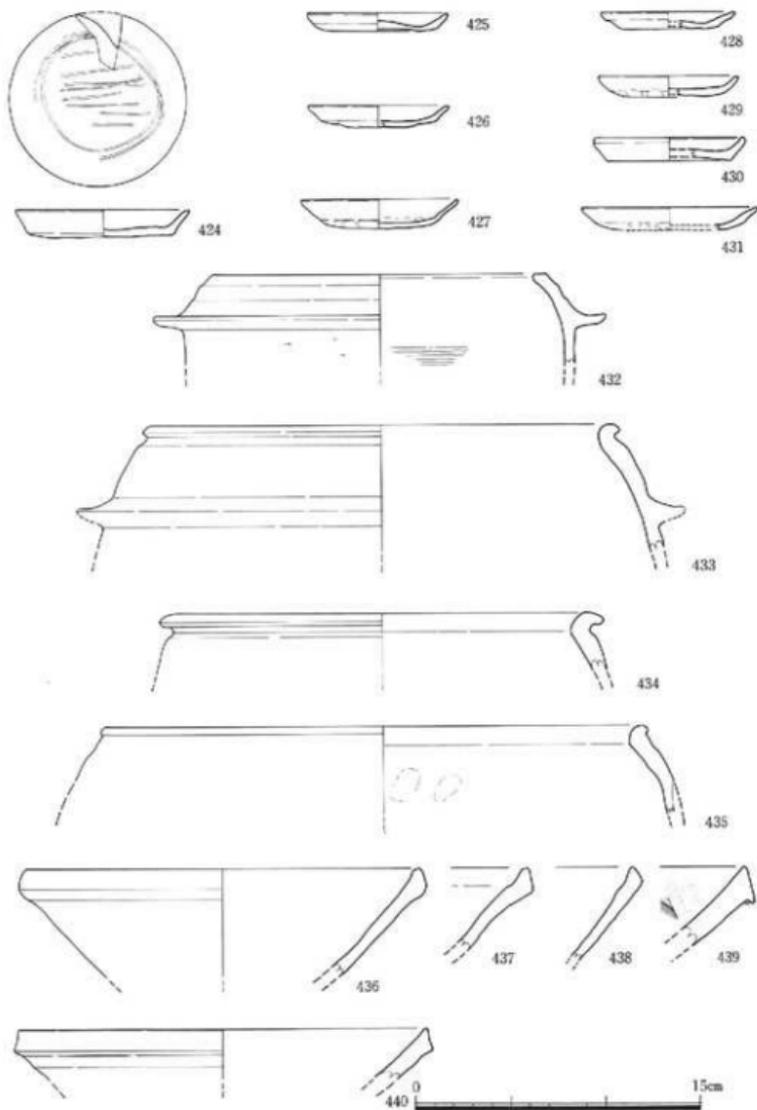
(441)は瓦器甕である。(443)は青磁皿である。

(444)は軒平瓦である。下外区に線鋸歯紋、内区に唐草紋を配する。(445)は軒丸瓦である。外区に珠紋、内区に巴紋を配する。

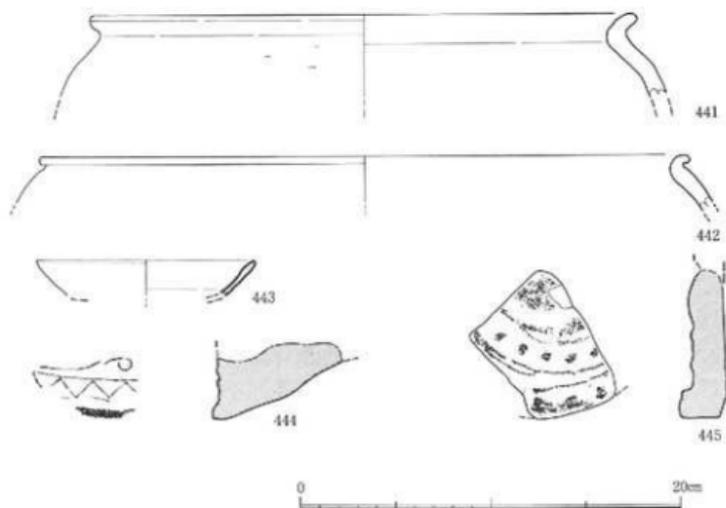
(446・447)は石器である。いずれもスクレーパーである。



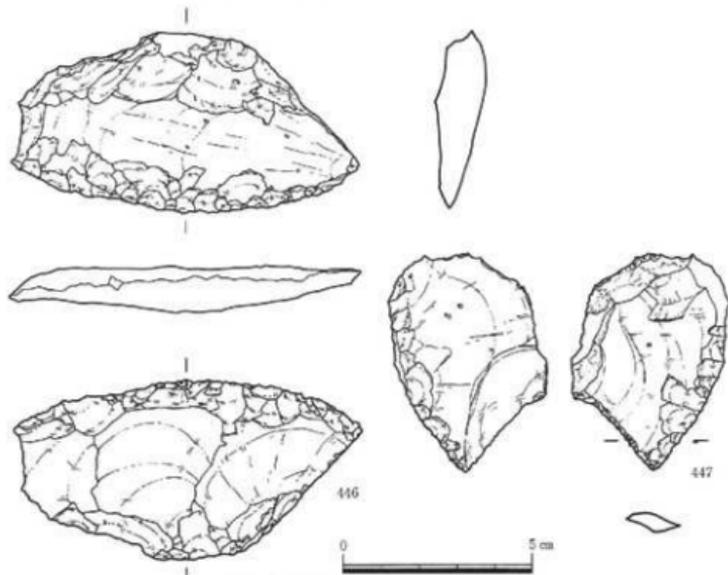
第73图 第1耕作面耕土出土土器 (1/3)



第74図 第1耕作面耕土出土土器 (1/3)



第75圖 第1耕作面耕土出土土器・瓦 (1/3)



第76圖 第1耕作面耕土出土土器 (2/3)

第2耕作面 (第91図、図版13)

第2耕作面は調査区の全面において検出した。耕作地基底面は北端でT.P.24.02m、南端でT.P.24.98m、比高およそ0.95mを測り、南から順次標高を減じている。

耕作土は灰黄褐色系の砂質シルトである。

東西方向の畦畔を11条、南北方向の畦畔を1条検出した。耕作地は都合8面検出した。畦畔の位置は、そのほとんどが先の第1耕作面での畦畔の位置を踏襲しているが、新たな位置に築かれたものや省かれたものもある。位置に変化が見られなかった畦畔は、先の畦畔上に灰褐色系粘質シルトをさらに盛土を施したものである。畦畔は断面蒲鋸形を呈し、基底部幅はおよそ1.0m、比高はおよそ0.2mを測る。

この面における畦畔の特徴として挙げられるものに、2条一对の畦畔の存在がある。北から2条目と3条目、5条目と6条目、7条目と8条目、9条目と10条目に見られる。これらは一方で先の畦畔を補修し使用しながら、片側に新たな畦畔を築いたものである。このため畦畔と畦畔の間は溝状を呈する。この底面は畦畔の基底面より高い。実際に流水があったかは不明である。

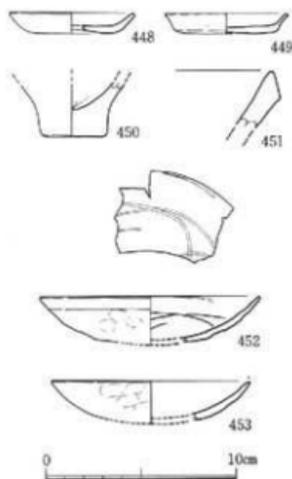
第2耕作面畦畔出土遺物 (第77図)

(448) は土師器皿である。(449) は瓦器皿である。

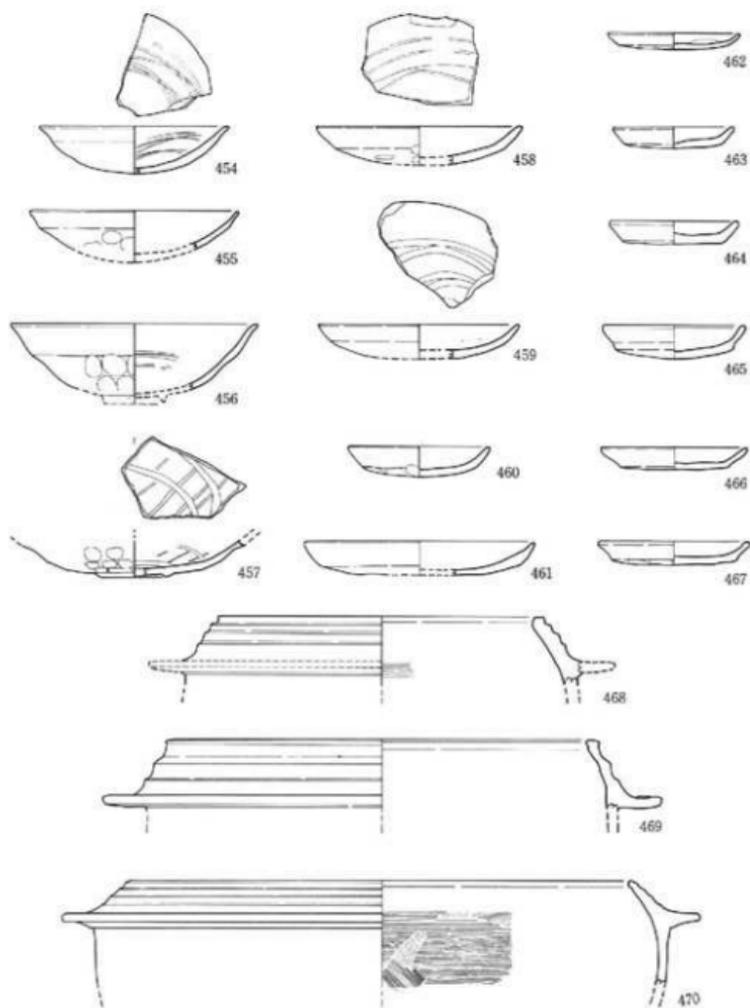
(450) は弥生土器である。(451) は瓦器鉢である。(452・453) は瓦器碗である。口径はそれぞれ11.6、10.4cmを測る。(452) は内面にヘラミガキが認められる。いずれも高台をもたないタイプと思われる。

第2耕作面耕土出土遺物 (第78～82図、図版36 a～37b・45)

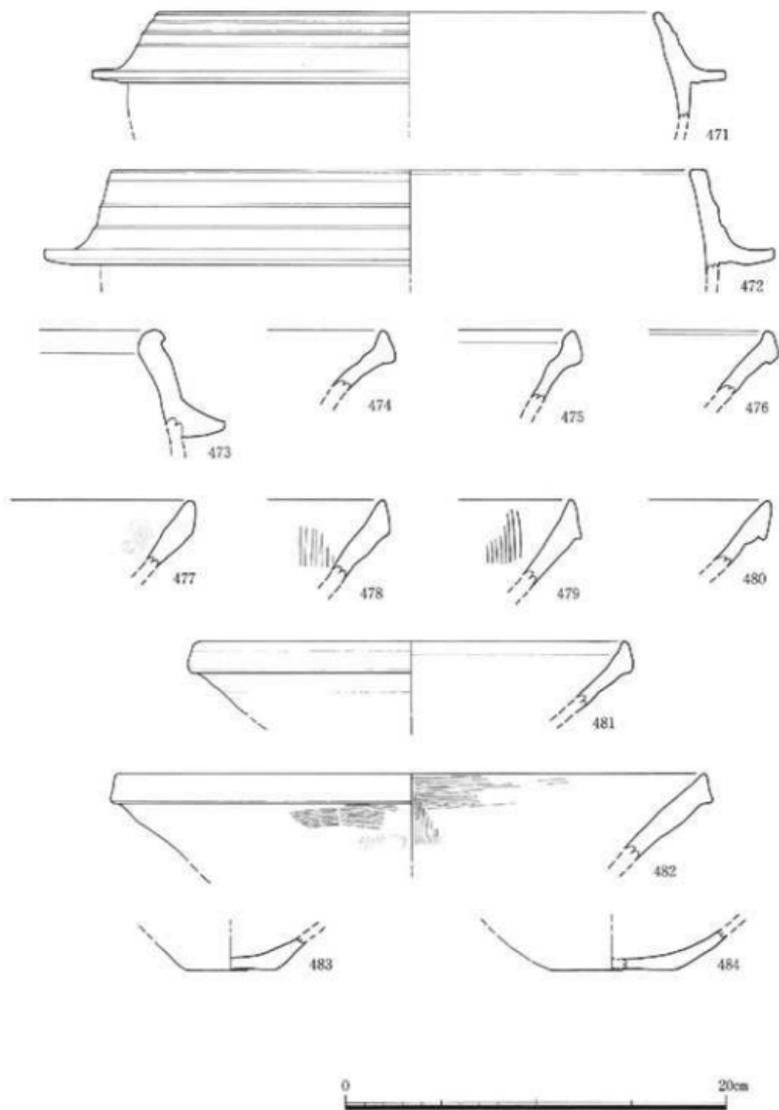
(454～457) は瓦器碗である。(457) は底径3.7cm。高台は扁平化して低い。内面に平行状暗紋と螺旋状暗紋の組み合わせとみられる。(458～461) は瓦器皿である。(462～467) は土師器皿である。口径は6.4～7.7の範囲に含まれる。(468～472) は瓦器羽釜である。(470) は口径26.2cm、現存器高5.7cmを測る。口縁部は低い段状を呈し、強く内傾する。体部外面にヘラケズリを、内面にハケ調整を施す。



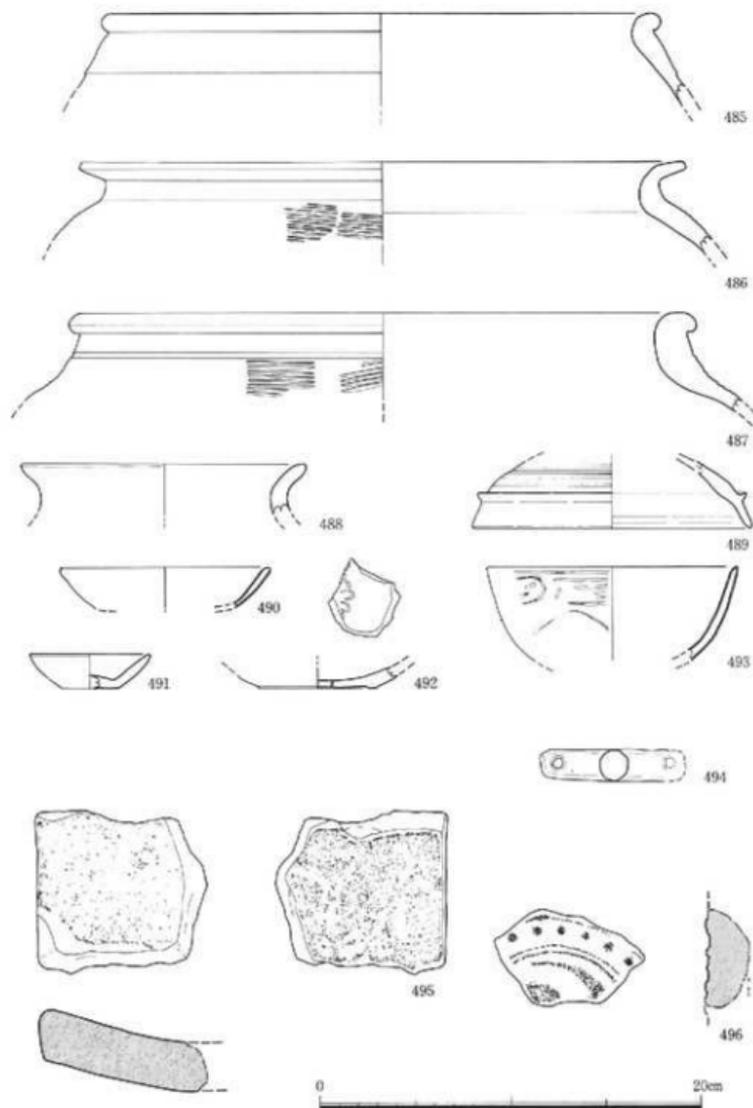
第77図 第2耕作面畦畔出土土器(1/3)



第78図 第2耕作面耕土出土土器 (1/3)



第79图 第2耕作面耕土出土土器 (1/3)



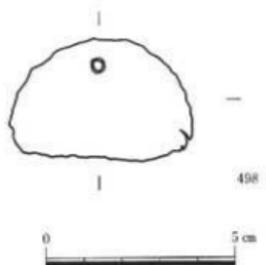
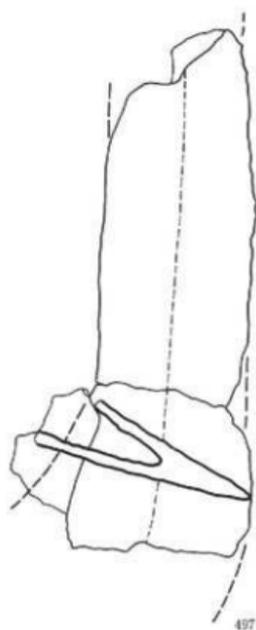
第80圖 第2耕作面耕土出土土器・土製品・瓦 (1/3)

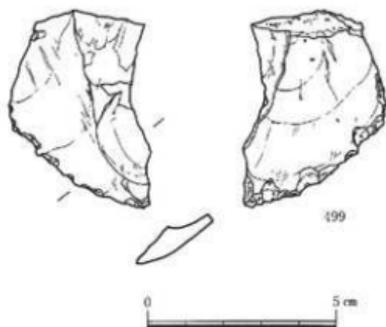
(472) は口径31.2cm、現存器高5.2cmを測る。口縁部は低い段状を呈し、直立する。(473・485) は土師器羽釜である。(474~476・481) は須恵器鉢である。(481) は口径22.3cm。口縁端部は全体に丸味を帯び、やや上方につまみあげ、下方にもやや拡張する。(477~480・482~484) は瓦器鉢である。(478) は外面に煤の付着が認められる。(482) は口径30.7cm。口縁端部はやや下方に拡張する。内外面にハケ調整を施す。内面に楕目を有する。

(485~488) は瓦器甕である。(486) は口径31.6cm。口縁部は大きく外反し、端部の断面形は方形を呈する。(487) は口径31.8cm。口縁部は短く、端部の断面形は丸味を帯びる。

(489) は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境に凸帯を巡らせる。天井部にカキメ調整を施す。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。形態、技法ともに堂山古墳出土の須恵器杯蓋に類似することから、初期須恵器の範疇に含まれるものと考えられる。(490) は白磁皿である。口径10.9cm。(491) は美濃瀬戸系の黒釉陶器小皿である。口径6.2cm。(492) は美濃瀬戸系の灰釉陶器碗である。(493) は龍泉窯系の青磁碗である。口径13.0cm。外面に雷紋を描く。釉の発色はオリーブ色を呈する。(494) は土錘である。一端を欠損するが、両端に孔を穿つ。現存長は6.9cm、径1.7cmを測る。(495)

第2耕作面耕土出土金属製品(2/3) は平瓦である。凹面、凸面ともにハナレ砂が認められる。(496) は軒丸瓦である。外区に珠紋を、内区に巴紋を配置する。(497) は鉄製鋤先である。断面は「V」字形を呈する。(498) は銅製の飾り金具である。仏具であろうか。





第82図 第2耕作面耕土出土石器 (2/3)

上面の標高を一定に整えていることや、第2耕作面と後述する第3耕作面との間に時期差があまり認められないことなどから、自然堆積ではなく人為的な堆積と推測される。前後の土地利用の様相から見て耕作に伴う整地層とみられる。

整地層出土遺物 (第83図、図版47)

(500~505)は瓦器鉢である。口縁部の形態には断面が三角形を呈するものと、下方に拡張する形態とがある。(500・501)は口径それぞれ28.4cm、28.8cmを測り、いずれも外面にヘラケズリを施し、内面にハケ調整を行う。拵目は現存では認められない。

(506)は備前焼の鉢である。底径10.0cm。内面に7本単位の拵目が認められる。

(507)は須恵器鉢である。底径13.7cm。

(508・509)は土師器皿である。

(510)は青磁碗である。(511)は白磁碗である。

(512)は平瓦である。凸面に縄タキを施し、凹面には布目匠痕が認められる。

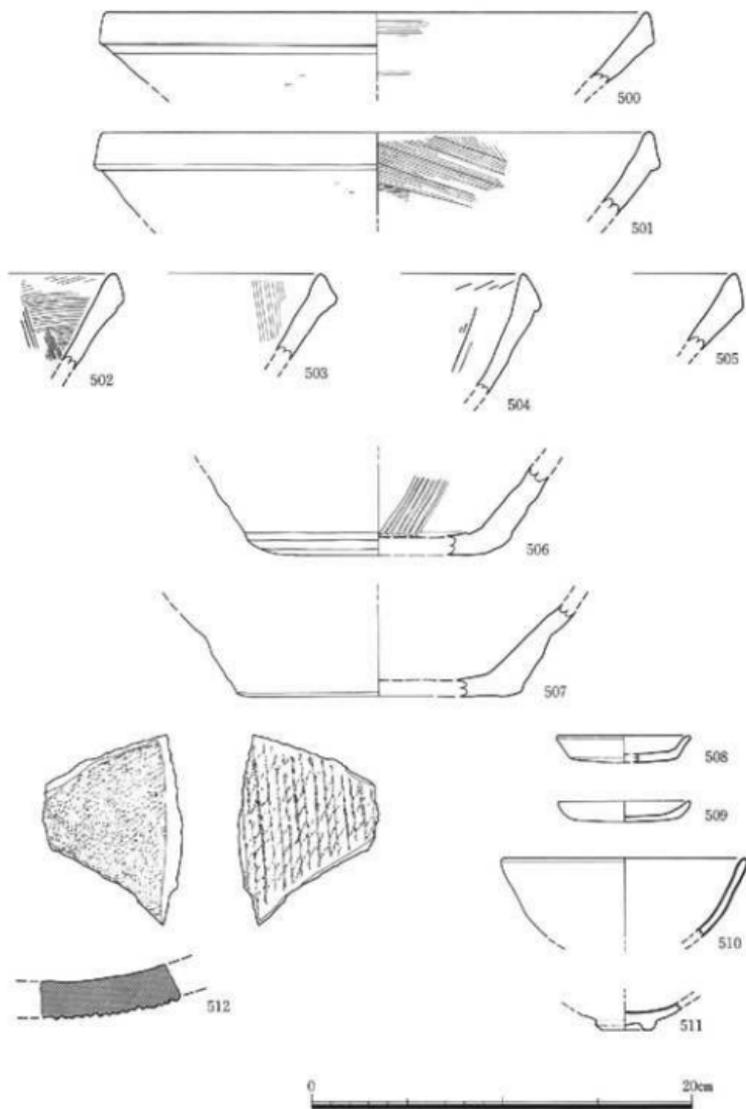
(565)は銅銭である。摩耗がはげしく判読し難いが「聖宋元宝」と思われる。「聖宋元宝」は宋代12世紀前半の鑄造である。

(499)はサヌカイト製スクレーパーである。器長46.0mm、器幅43.8mm、重量19.4gを測る。

整地層

第2耕作面の上面に堆積する黄灰色系砂質シルト層である。およそ30~40cmの堆積である。

この層の基底面では畦畔は確認されなかった。また第2耕作面の畦畔を覆う形で調査区の低地部にのみ認められ、



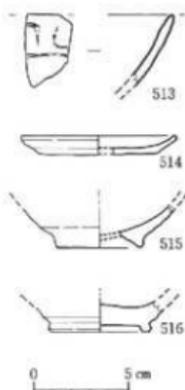
第83圖 整地層出土土器・瓦 (1/3)

第3耕作面 (第92図)

調査区の北側半分で検出した。耕作地の基底面は北端でT.P.24.60m、南端でT.P.24.70m、比高およそ0.1mとほぼ平行である。

耕作土は、黄灰色系の砂質シルトである。耕作土には厚さ5~10cmのいわゆる「床土」が伴う。この「床土」は褐色系砂質シルトである。

東西方向の畦畔を3条、南北方向の畦畔を1条検出した。耕作地は都合4面検出した。畦畔の位置は、第2耕作面のそれを踏襲している。しかし畦畔は、整地土層の上面に灰色系の砂質シルトをもって新たに築かれていることが断面観察により確認された。



第84図 第3耕作面
耕土出土土器 (1/3)

各耕作地の「床土」層上面において、東西方向の畦畔に平行する溝を多数検出した。これらの溝は幅およそ20cm、深さおよそ5cmを測る。埋土は耕作土と同じである。これらは、耕作における鋤跡と見られ、いわゆる「鋤溝」と考えられる。

北から3条目の畦畔の北側に沿って幅30cm、深さ20cmの浅い溝状の遺構を検出した。

第3面耕作面耕土出土遺物 (第84図、図版38a)

(513) は龍泉窯系青磁碗である。口縁部外面に雷紋を施す。(514) は土師器皿である。口径9.0cm。(515) は李朝粉青沙器碗である。底径4.4cm。(516) は美濃瀬戸系灰釉陶器碗である。底径5.0cm。底面に回転糸切り痕が認められる。

第4耕作面 (第93図、図版14a)

調査区の北半分で検出した。耕作地の基底面は、北端でT.P.24.68m、南端でT.P.24.96m、比高およそ0.3mを測り、南から順次高度を減じている。

耕作土は黄灰色系の砂質シルトである。耕作土には厚さ5~15cmの「床土」が伴う。「床土」は黄褐色系の砂質シルトである。

畦畔は、調査区に東西方向のものを3条、南北方向のものを1条検出した。これらは、第3耕作面の畦畔上に更に盛り土を行い、補強したものである。

各耕作地の「床土」層上面において、東西方向に走る「鋤溝」とみられる溝を多数検出した。

また北から1、2枚目の耕作地では、その「床土」層下において東西方向に走る幅40cm、深さ5cmの溝を23条検出した。これらは先の「鋤溝」とは幅が異なり、その形状から「畝

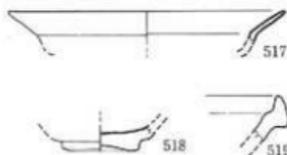
溝」と考えられる。3、4枚目の耕作地では検出されなかった。

第4耕作面耕土出土遺物 (第85図、図版38a)

(517) は白磁皿である。口径14.6cm。口縁部が大きく外反する。

(518) は美濃瀬戸系天目椀である。底径3.2cm。高台を削り出しで成形している。外面は露胎である。

(519) は須恵器鉢である。口縁端部は上方に屈曲する。



第5耕作面 (第94図、図版14b)

調査区の全面で検出した。耕作地の基底面は北 第85図 第4耕作面耕土出土土器 (1/3) 端でT.P.24.86m、南端でT.P.25.36m比高およそ0.5mを測り、南から順次高度を減じている。

耕作土は黄灰色系砂質シルトである。耕作土は厚さ5~10cmの「床土」を伴う。「床土」は褐色系砂質シルトである。

畦畔を8条検出した。その位置は第1耕作面とはほぼ同じである。畦畔は、第4耕作面の畦畔を更に盛土を施し、補強したものである。

耕作地内で「鋤溝」とみられる溝を多数確認した。幅およそ20cm、深さ5cmを測る。埋土は耕作土と同じである。

(285-OS)

北から3条目と4条目とが2条一対になっており、その間が溝状(285-OS)となっている。これらの畦畔は基底幅およそ80~90cm、比高約10cmを測り、間の溝状の遺構は幅26~84cm、深さ約15cmを測る。またこの溝状遺構の検出東端部で20~30cm大の石が3個固まって出土した。中には使用痕が認められるもの(520)もあった。

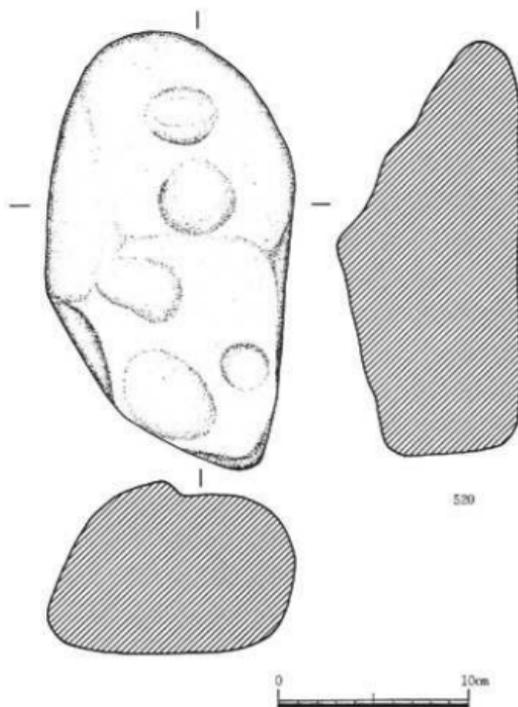
当初、この溝状の遺構が用水路としての機能を果たしていたと考え、畦畔上に「水口」の存在を想定して検出作業を行ったが検出できず、実際に水が流されていたかは不明である。しかし、固まって出土した石は、その地点が第4耕作面等での東西方向と南北方向の畦畔との交差箇所であることから、なんらかの意味をもって置かれたものと推測される。



第85図 第4耕作面耕土出土土器 (1/3)

285-OS出土遺物 (第86図、図版45)

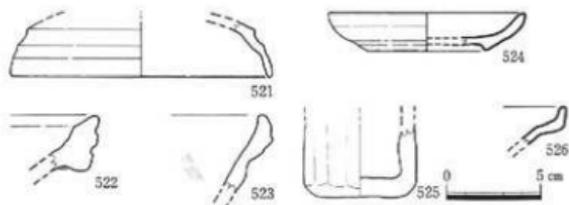
(520) は数箇所に打撃による凹みが認められる。タタキ石の一種とみられる。材質は砂岩である。時期は不明。



第86図 285-O S出土石器 (1/2)

第5 耕作面耕土出土遺物 (第87図、図版38a)

(521) は須恵器杯蓋である。口径13.6cm。天井部と口縁部を画する稜線は認められない。(522) は備前焼の鉢である。口縁部外面に2条の凹線が巡る。(523) は須恵器鉢である。(524) は美濃瀬戸系灰釉陶器皿である。口径10.3cm、器高2.0cmを測る。釉は全面に施し、オリーブ色を呈する。(525) は土師器塩壺である。底径4.0cm。体部に面取りを施す。(526) は龍泉窯系青磁鉢である。



第87図 第5耕作面耕土出土土器 (1/3)

第6耕作面 (第95図、図版15b)

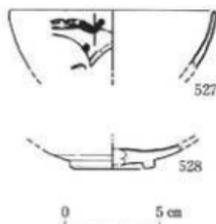
調査区の全面で検出した。耕作地の基底面は北端でT.P.24.90m、南端でT.P.25.48m、比高およそ0.6mを測り、南から順次高度を減じている。

耕作土は黄灰色系の砂質シルトである。厚さ15~20cmを測る。耕作土には厚さおよそ5cmの「床土」が伴う。「床土」は橙色系の砂質シルトである。

畦畔は東西方向のものを3条検出し、この他に畦畔と推定されるものを3条確認した。位置はほぼ第5耕作面のものを踏襲している。

第6耕作面耕土出土遺物 (第88図)

(527) は染付碗である。(528) は白磁碗である。底径4.1cm。高台を削り出しにより成形している。外面は露胎である。



第88図 第6耕作面
耕土出土土器 (1/3)

第3項 中近世耕作地の時期について

耕作土は、しばしば攪拌が行われる。時としてこれは下層にまで達し、このため下層遺物と上層遺物とが混じり合うことが起こる。今回の調査においては遺構検出面における「鋤溝」等の遺構に関して、上層からの掘込みであるのかその面からの掘込みであるのかを十分に検討していないため、さらに遺物の混在が考えられる。また、調査時の混入も考えられる。そして耕作土が客土により他所より運ばれたことも想定されることから、各層出土の遺物が、即、耕作期間を反映しているとは考え難い。このため、各耕作面の時期決定には大きな幅を持たせた。

時期決定に際し、各耕作土・整地層出土遺物の器種分類を行った。結果は次の通りである(第89図)。陶磁器類は第1耕作面以降に見られる。第1、第2耕作面より出土の陶磁

器類はそのほとんどが輸入陶磁器である。また第1耕作面から葉付が1点検出されているが、これは調査時の混入とみられる。瓦器類が占める割合は第1・第2耕作面が圧倒的に高く、うちわけでは瓦器碗・皿が2/3に及ぶ。分類時には瓦器碗を細分化して行ったが、高台形では高台が扁平化した低いものが圧倒的で、内面調整では螺旋状の暗紋が多く、暗紋が認められないものもある。

次に各層、各耕作面ごとの遺物を検討し時期決定を行っていくことにする。

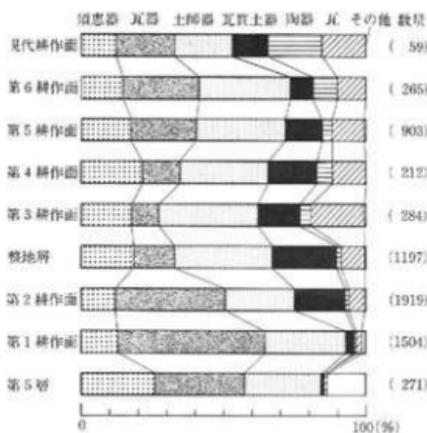
第5層からの出土遺物には奈良・平安時代等の古い時期に比定されるものを比較的多く含んでいるが、新しい要素としては、内面に螺旋状の暗紋を施し、高台が扁平化した低いタイプの瓦器碗(403)が認められる。これは14世紀前半から中頃にかけての時期に比定されるものであるが、相対的数量が極めて少なく、混入の可能性も考えられる。

以上のことからこの層は、14世紀前半から後半にかけての大きな幅でとらえられる。

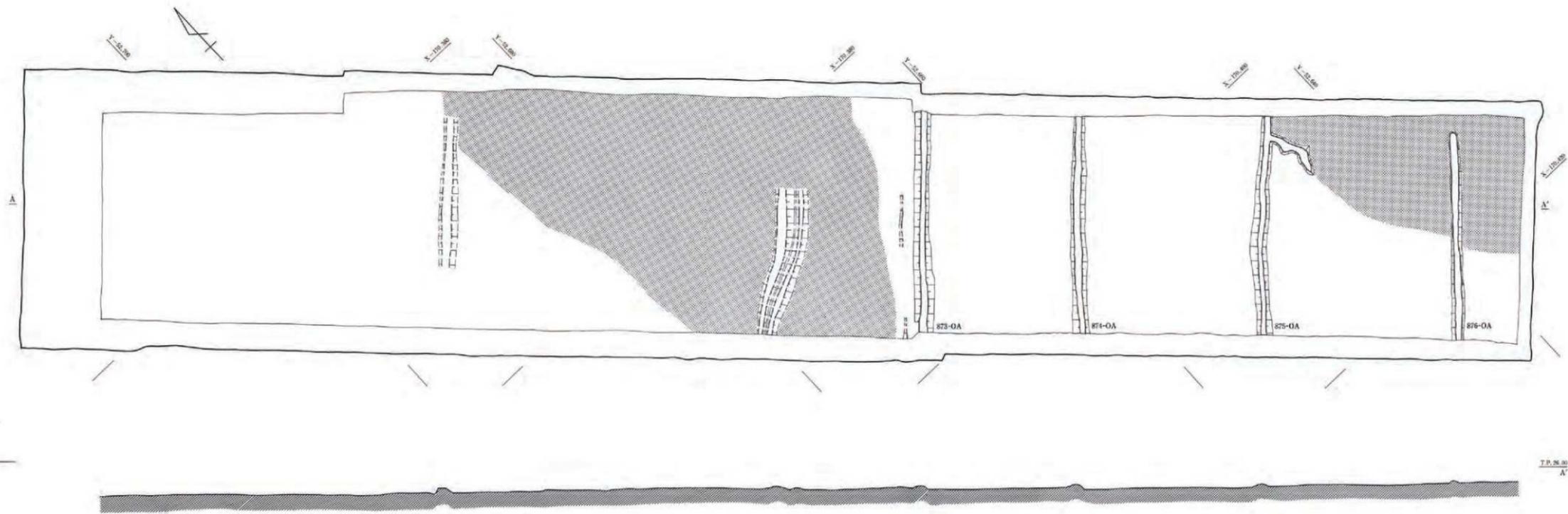
第1耕作面耕土出土の瓦器碗の中で新しい要素を含むものとしては、内面に螺旋状の暗紋を施し、高台は扁平化した低い形態(421~423)のものが挙げられる。これは14世紀前半から中頃の特徴を示すものであり、このタイプの瓦器碗が大多数を占めた。また瓦器羽釜(432)は14世紀末から15世紀初頭に比定されるものである。一方この耕作面に伴う畦畔からは、14世紀初頭から前半に比定される遺物(406・407)が出土し、それ以降の遺物は見られない。

以上のことからこの耕作面は、14世紀前半に耕地化と耕作の開始がなされたもので、その時期は14世紀末から15世紀初頭まで及んだと推定される。

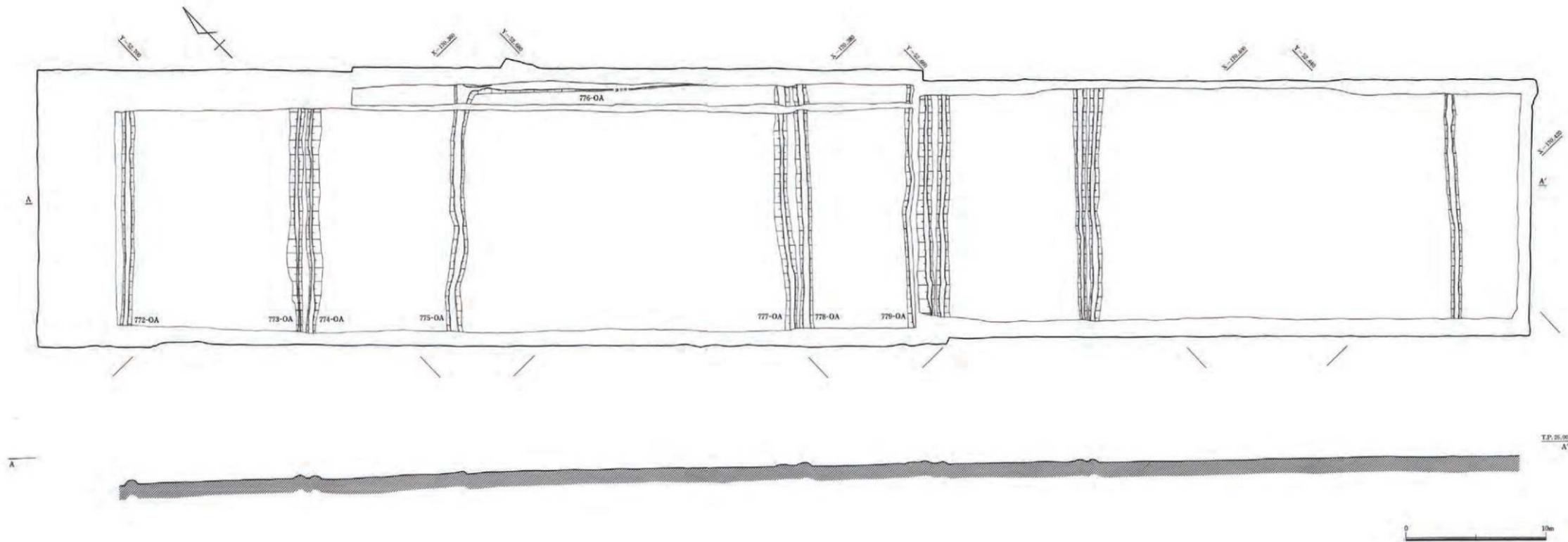
第2耕作面耕土出土の瓦器碗は、第1耕作面と同じタイプのものが多い。しかし畦畔からは、高台を持たないタイプとみられる瓦器碗(452・453)が出土している。これらの瓦



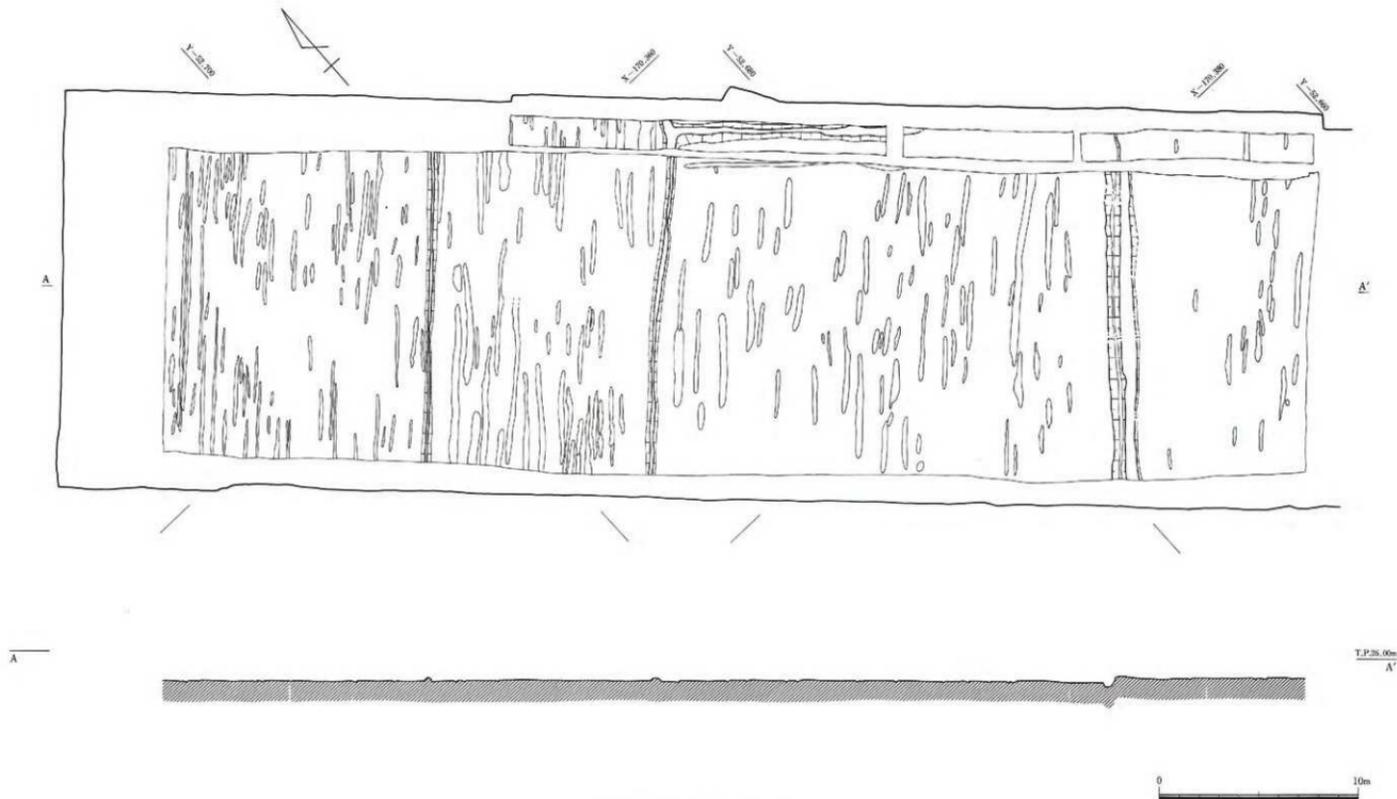
第89図 層別遺物比率グラフ



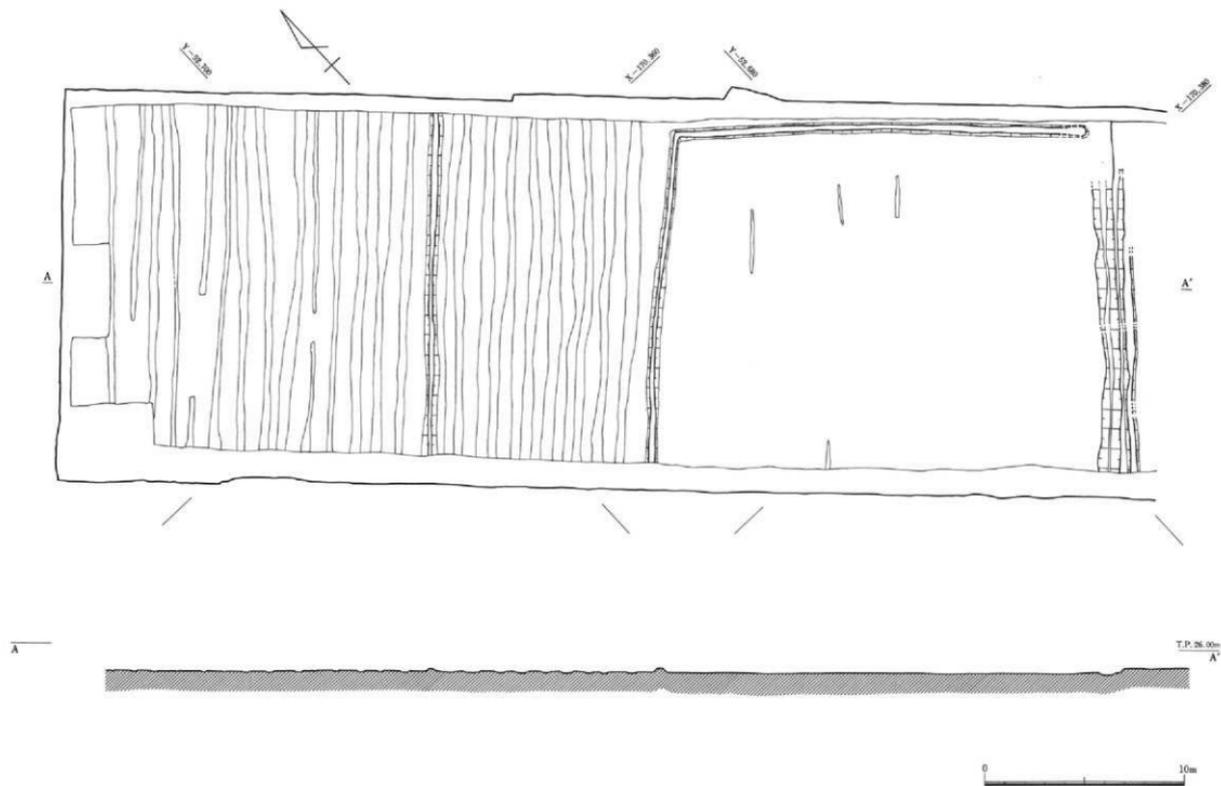
第90圖 第1輯作面平面・断面図 (1/200)



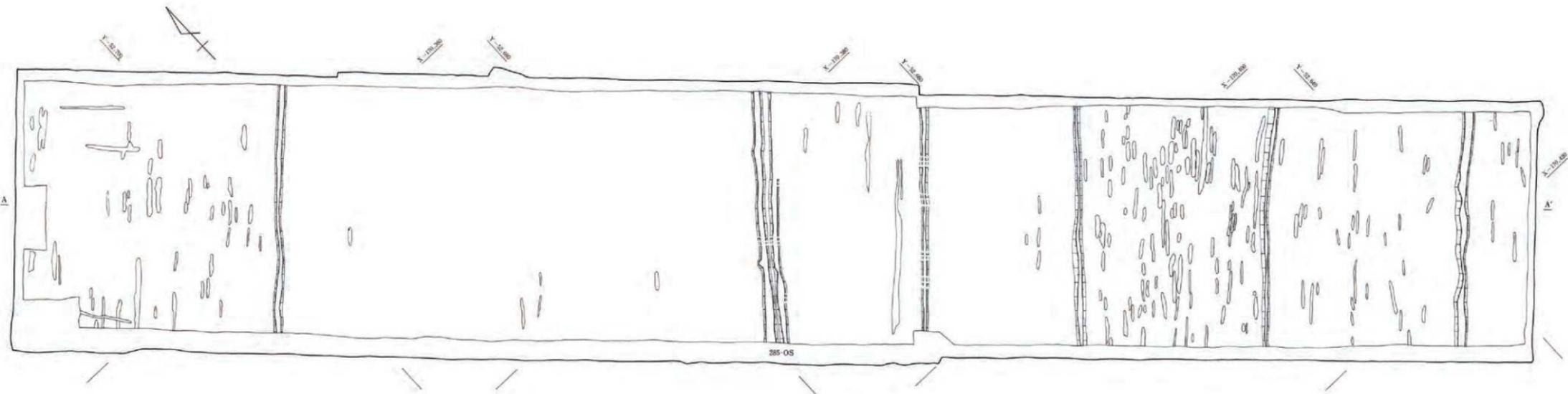
第91圖 第2耕作面平面・断面圖 (1/200)



第92図 第3耕作面平面・断面図 (1/200)

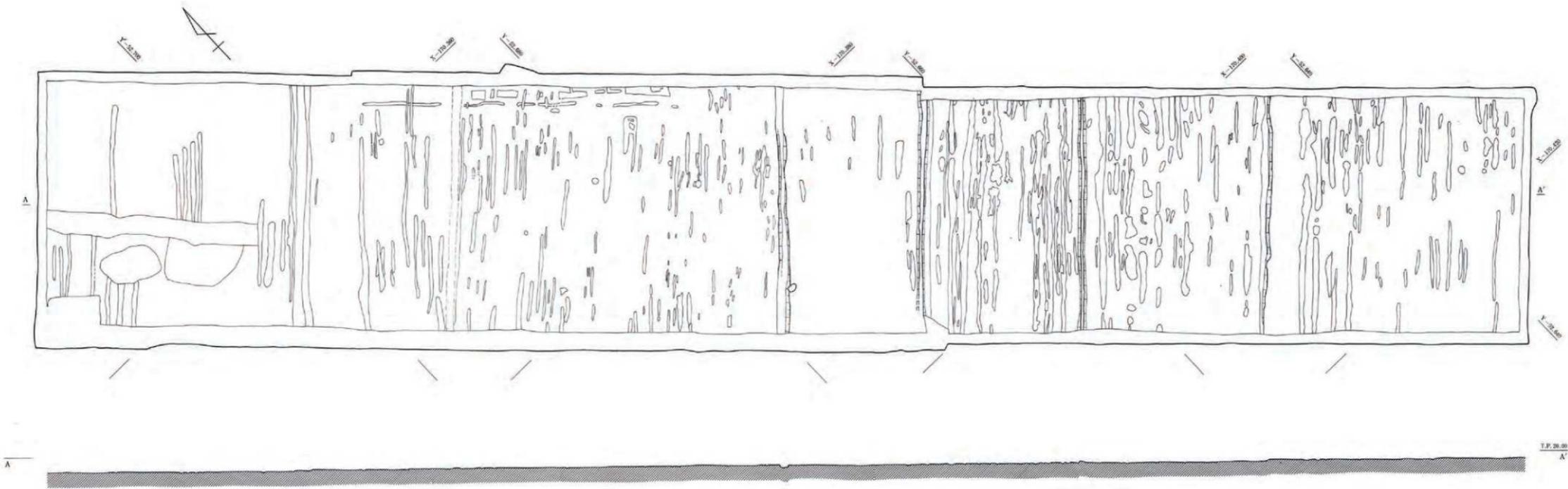


第93圖 第4耕作面平面・断面圖 (1/200)



第94図 第5輯作面平面・断面図 (1/200)





第95图 第6号作面平面・断面图 (1/200)

器碗は14世紀末に比定される。瓦器羽釜にも、第1耕作面ではみられない、口縁部が直立に近くなる新しい要素が出現する(472)。これは15世紀前半の特徴を示すものであり、瓦器甕(487)もこれと同じ時期に比定される。また陶磁器類も少量であるが出土している。これらは15世紀後半に比定されるものである(490-493)。

以上のことからこの耕作面においては、14世紀末から15世紀初頭にかけて耕作が開始され、15世紀後半まで及んだと推定される。

整地層では瓦器碗・皿が急激に減少する。時期決定の手掛かりとなる遺物は少ないが、出土した遺物の下限は16世紀前半のものと思われる(510・511)。

このことから、整地は16世紀前半頃に行われたと推定される。

第3耕作面以降は、時期決定の手掛かりとなる遺物が少なく、全体の兼合で時期決定を行うこととする。

第3耕作面耕土からは出土遺物の量が減少し、比率では陶磁器類が増大する。出土遺物に新しい要素が見られず、時期決定は困難である。

第4耕作面耕土出土遺物もその量は極めて少ないが、(517・518)等から16世紀代に比定される。

第5耕作面耕土出土遺物はその量が増大する。この層から染付が多く含まれるようになる。(522)は17世紀前半に比定されるが、染付は17世紀末を遡らないと思われる。

第6耕作面耕土出土遺物は、再びその量が減少する。染付が多く、18世紀以降に比定される。

これらのことから、第3耕作面は整地が行われた直後、16世紀前半頃から耕作が開始され、引き続き第4耕作面で耕作が行われたと推測される。第4耕作面は17世紀代の遺物が顕著でないことから、16世紀代に耕作を終えたと考えられる。第5耕作面の上限は不明であるが、第4耕作面から引き続き耕作が行われ、17世紀末から18世紀代まで存続したと推測される。第6耕作面の上限は不明であるが、18世紀代から19世紀代にかけて耕作が行われたと考えられる。

以上、各耕作面・整地層の時期決定をまことに大雑把であるが行ってみた。その結果、山ノ内遺跡A地区における耕地化は客土等の問題を加味しても14世紀後半には行われていたと推測される。

第5節 小 結

第1次調査区では、調査の結果次のことが判明した。

旧石器時代の遺構、遺物は共に認められなかった。

縄紋時代に特定できる遺構、包含層は、認められ無かった。但し、自然河川の初現が縄紋時代に遡る可能性が高い。また、後世の遺物に混在して中津式を初めとする縄紋時代後期の土器を若干出土しているが、その量は僅かである。他にはサヌカイト製の石器、剥片などに形態や風化の度合などでこの時期に比定されるものがある。

弥生から古墳時代の遺構は、自然河川が2条と、それに挟まれた中州状台地から竪穴住居2棟、土坑1基、溝1条、ピット群が検出された。時期は、自然河川が弥生中期後半から古墳時代中期、それ以外は弥生時代後期と考えられる。竪穴住居は、方形プランを呈し1辺6mの大形のもの1辺4.5mの小形のものがある。2棟とも火災によって廃棄され、床面上には炭化材が残存していた。住居内には、若干の土器と石器を認め、完形の手焙形土器が据え置かれた状態で出土している。土坑、ピット群は、性格は明かではない。溝は、幅0.5~1.0mの小溝で、居住域の区画、灌漑水路としての機能が考えられる。自然河川は、調査地の中央部を西南西に横断するものと、北端部を北西に流れるものがある。幅は、約10から35m、深さ1.5m内外の規模で、次第に埋没している。弥生時代後期には、土器が数多く投棄される。また河川内は、部分的に水田化された可能性も考えられる。以上、この時代は、弥生時代後期後半の集落の一角を検出したが、遺物の時期からは、弥生時代中期後半の集落も付近に存在した様である。自然河川は、牛滝河の旧流路の一つと考えられ、それが、弥生時代の地形環境を規定したが、古墳時代の中期後半以前にはほぼ埋没し、この時点で環境がかなり変化したと考えられる。

奈良から鎌倉時代は、明瞭でないが、包含層、土坑2基が存在する。後世の堆積土からは、当該期の遺物をかなり出土するが、客土等で周辺の包含層が削られ、持ち込まれたと考えられる。

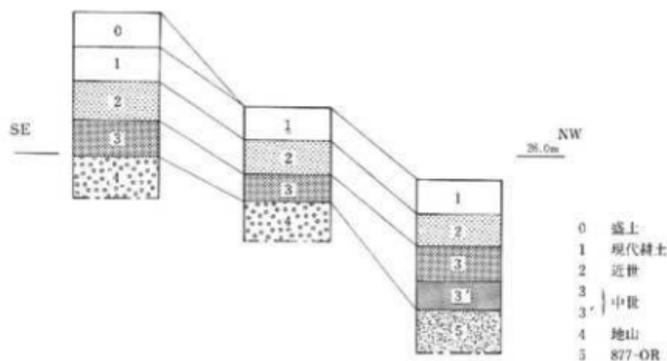
室町から江戸時代は、5枚の耕作面とそれに伴う畦畔、鋤溝、水路などが検出されている。初現は、14世紀前半から15世紀初頭で、耕土は、地形の低い部分に限られるが、条里地割りが施工されていたことが窺える。15世紀代には、耕土が全面に及ぶ様になる。大規模な整地の後は、16世紀代2面、17世紀1面、18世紀1面の耕作面を認める。15世紀以降は鋤溝を伴い裏作が行われたことを示す。

第IV章 第2次調査の成果

第1節 層序・概要

本調査区における層序は、現代の盛土層の他、第1層から第6層に大別でき、その内第3層は北西部で第3'層に分かれる。また南東部においては、第3層下で縄紋土器を包含する土層を確認した。

第1層から第3'層は、中世から現代に至る水田層である。遺構は主に第4層上面において検出したが、一部のもは縄紋土器包含層の上面で検出した。検出した遺構は土坑7基、溝6条、自然河川または流路4条の他、畦畔2本である。これらは、出土遺物が乏しく時期が判別し難いものもあるが、概ね縄紋時代から弥生時代のもものと古墳時代以降のものに分けることができる。



第96図 基本層序柱状図

第2節 縄紋時代～弥生時代

第1項 概要

当時代の遺構としては、土坑7基、溝2条、河川1条があげられるが、縄紋時代のものは包含層を確認したのみで、明確な遺構は検出できなかった。

第2項 遺構各説

1414-00 (第97図)

G24GQに位置する。

1313-0Sに切られているため、形状は不明であるが、長軸約1.5mの楕円形に近い不整形なものと思われる。深さは約45cmである。

埋土はにぶい黄色粘土層、明黄褐色粘土層、にぶい黄褐色粘土層、灰黄褐色粘土層、黄灰色粘土層、暗褐色粘土層で、多数の焼上塊が包含される。ただし側壁面に焼痕は認められない。

出土遺物は認められない。

1415-00 (第97図)

G25SD・SEに位置する溝状の不整形なものである。長軸約3m、短軸約70cm、深さは約30cmである。埋土は灰黄褐色粘質シルト層、褐灰色粘質シルト層である。

出土遺物は認められない。

1416-00 (第97図)

G24QYに位置する。

楕円形を呈する。長径約40cm、短径約30cm、深さ約20cmである。埋土は灰黄褐色粘質シルト層である。

出土遺物は認められない。

1417-00 (第97図)

G25SDに位置する。楕円形を呈する。長径約80cm、短径約40cm、深さ約5cmである。埋土は灰黄褐色粘質シルト層である。

出土遺物は認められない。

1418-00 (第97図)

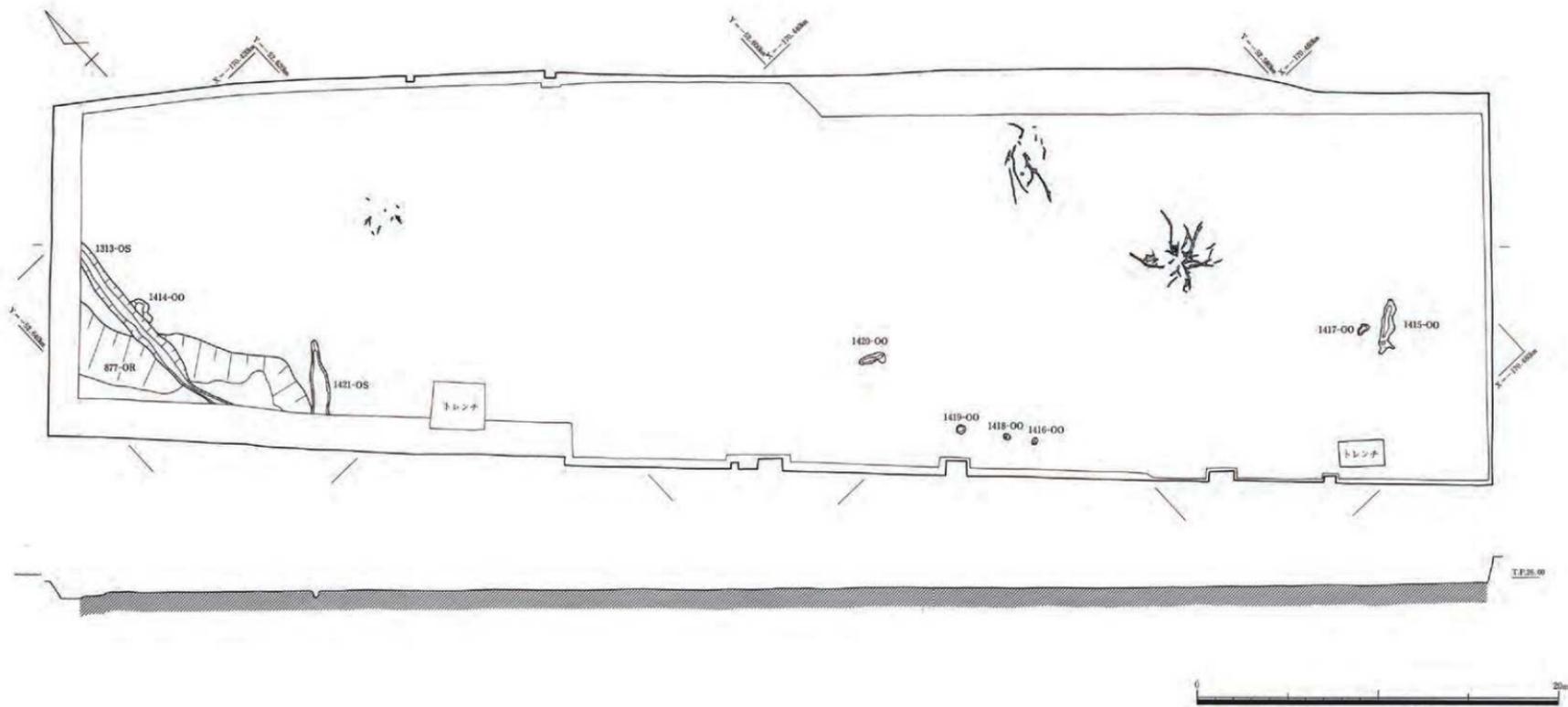
G24PXに位置する。楕円形を呈する。長径約40cm、短径約30cm、深さ約20cmである。埋土は灰黄褐色粘質シルト層である。

出土遺物は認められない。

1419-00 (第97図)

G24PXに位置する。円形を呈する。直径約50cm、深さ約20cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質シルト層である。

出土遺物は認められない。



第37図 縄文時代～弥生時代遺構平面図 (1/200)